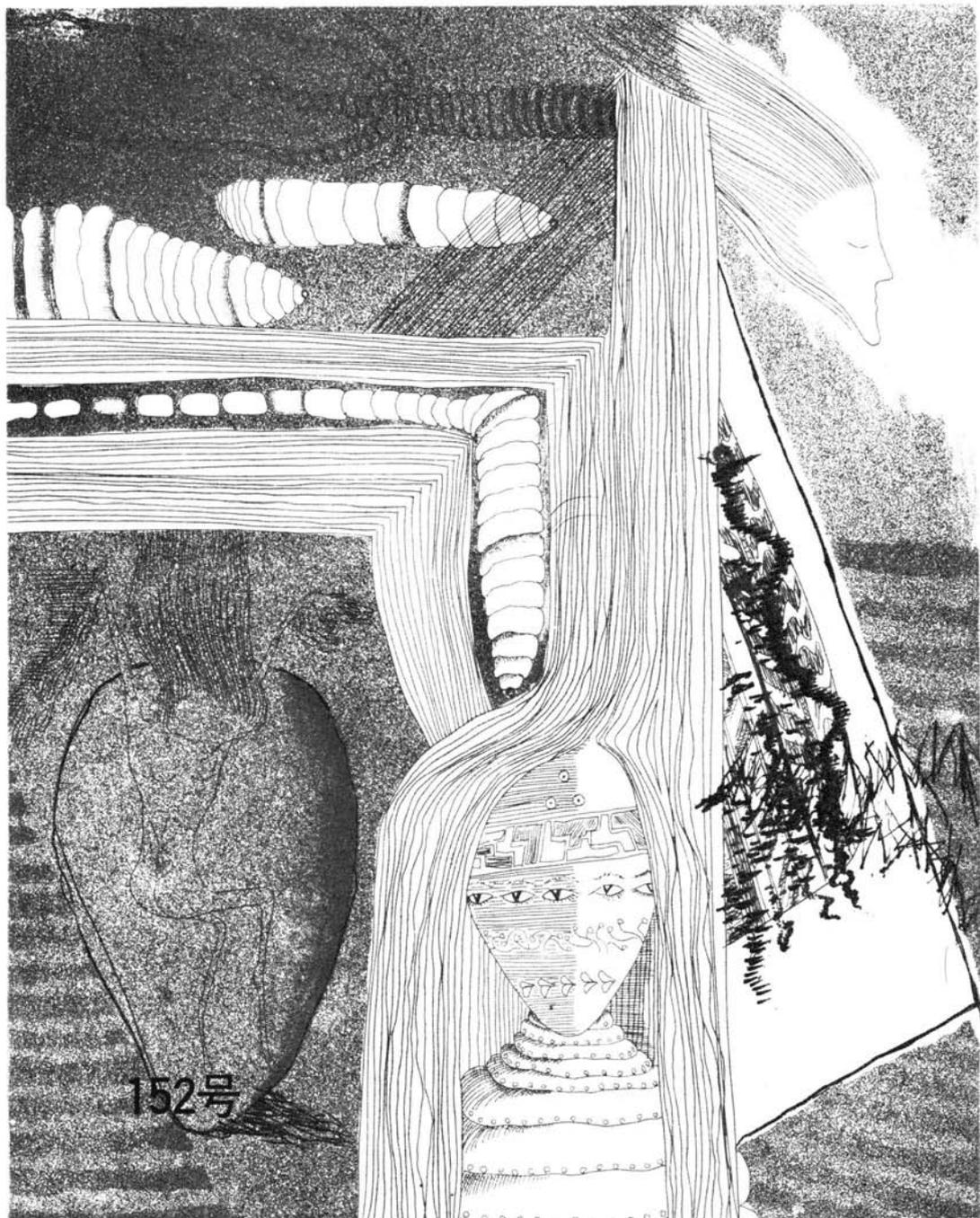


わいふ

特集 男らしさは作られる

神話としての男らしさ
対談・男らしさの日本的構造

継続ティーチ・イン / 主婦といわれる私たち



書きたいひと
 考えたいひと
 知りたいひと
 怒りたいひと
 「わいふ」は
 あなたの雑誌です
 あなたの中にあるものを
 声にしてみませんか？
 あなたは 発見するでしょう
 同じことを
 考えていたひとが
 あそこにも ここにも
 いたことを
 そして
 みんなで考えるとき
 あなたは もう
 一人ぼつちではない
 ということ

未来社

東京都文京区小石川3の7
 電話 03-814-5521
 振替 (東京) 7-87385

伊藤 雅子著

女の現在

—— 育児から老後へ

混乱するいまの女の状況・母と子のあり方を見据え、問題の根を探る。前著「子どもからの自立」とひと続きの問題として女のいまを捉え、女自ら現状を拓くにはどのような力が養われねばならぬかを具体的に論及。B6判カバー・二〇〇円

〔既刊・関連書から〕

国立市公民館市民大学セミナーの記録

主婦とおんな

B6判・八五〇円

伊藤雅子著

子どもからの自立

B6判一〇〇〇円

山代 巴著

連帯の探求 民話を生む人びと

B6判一〇〇〇円

もろさわようこ著

おんな・部落・沖繩

B6判一〇〇〇円

もろさわようこ著

おんなの戦後史

B6判一〇〇〇円

もろさわようこ著

おんなの歴史(上・下)

B6判各八五〇円

もろさわようこ著

信濃のおんな(上・下)

B6判各八五〇円

松井やより著

女性解放とは何か

B6判一〇〇〇円

つまり

豪雪と過疎と

B6判・九五〇円

妻有の婦人教育を考える集団編

特集・男らしさは作られる

対談・男らしさの日本的構造……………青木やよひ・ジョン・ネイスン・26

神話としての男らしさ……………鷲見徹也・22

特集投稿……………徳光利子・高野香枝子・高橋裕見子・15
京野美枝子・風間ゆり・安達日南子

■ 詩の中の女③……………駒尺喜美・2

■ シリーズ③手さぐりの自立 / 中年からの手習い……………44

座談会・継続ティーチ・イン / 主婦といわれる私たち……………8

■ わいふ家庭科・冠婚葬祭 / 互助会を利用するには……………40

たていと・よこいと……………新井光子・石原宗里・野口欣子・鞍智美知子・4
永井敬子・田原多美子・松田喜代子・西村香那子

■ わいふ情報コーナー……………33

相州八菅山—連載第二回—……………足立原美枝子・34

■ おしゃべり……………48

■ 編集だより……………52

表紙・石川敏夫

寢台を求む

どこに私たちの悲しい寢台があるか
ふつくりとした寢台の白いふとんの中に

うづくまる手足があるか

私たちは男はいつも悲しい心でいる

私たちは寢台をもたない

けれどもすべての娘たちは寢台をもつ

さうして白い寢台の中で

小鳥のやうにうづくまる

すべての娘たちは寢台の中で

たのしげなすすりなきをする

ああ なんといふしあはせの奴らだ

この娘たちのやうに

私たちもあたたかい寢台をもとめて

私たちもさめざめと

すすりなきがしてみたい

みよ すべての美しい寢台の中で

娘たちの胸は互にやさしく抱きあふ

心と心と

手と手と

足と足と



しみついた優越意識

駒尺喜美

この詩の背後からは、「男と女の間には深く暗い河がある」という、あの男の歌声が聞えてくるように私には思われる。

「私たち男はいつも悲しい心で悶々としており、それをいやすための寢台がない。だが、女たちは寢台をもっていて、その中で「たのしげなすすりなき」をする。「なんといいふしあわせな奴らだ」つまり男はこんなに悲しい心でいるのに、女には一向に通じないと、朔太郎は歌っているのだと思う。

だが、この男の歎きには、そこはかとなく男の優越意識がしみこんでいるようである。

「猿に似たちいさな手足」とか「小鳥のやうにうづくまる」とか、男からみれば女は自分と同種の動物ではなく、どうしても異種の動物にみえるらしい。その理由は、男が「大きな人類の寢台をもとめる」のに対して、女は家の中の小さな寢台しか求めないからである。男は人類・世界・社会を舞台にして、政治をあやつり哲学を論じ、詩をつくる。だから男の心は「いつも悲しみにみちて」いるのである。「私たちの男心はまづしく」とか「ひからびた醜い手足」とか、一見、男の世界の醜さを自覚しているかに聞えるが、しかしよくよく読めば、それは女の世界とは次元の違う、「大きな人類」を背負っているから、男は苦悩し疲れるのである。と、朔太郎は考えてい



詩の中の女

— その3 —

からだとからだとを紐にてむすびつけよ
心と心と

手と手と

足と足と

からだとからだとを

撫でることによって慰めあへよ

このまっ白の寝台の中では

なんといふ美しい娘たちの皮膚の喜びだ
なんといふいちぢらしい感情のためいきだ

けれども私たちが男の心はまづしく

いつも悲しみにみちて

大きな人類の寝台をもとめる

その寝台はばね仕掛で

ふっくりとしてあたたかい

まるで大雪の中にうづくまるやうに

人と人との心がひとつに解けあふ寝台

かぎりなく美しい愛の寝台

ああ どこに求める

私たちの悲しい寝台があるか

どこに求める

私たちのひからびた醜い手足

このみじめな疲れた魂の寝台は

どこにあるか

(青猫・萩原明太郎)

るらしい。

男は妻や恋人や娼婦の寝台に、いつとき自己をいこわせる。しかしどのように女と抱きあおうとも、所詮男類と女類とは違うのだ、という傲慢な諦めがあるために、男は全面的に自己を解放することができない。つきつめていえば男は人間の憂愁にみち、女は豚の幸せにみちているために、お互に交流しないというわけである。人間からみれば、豚や小鳥はさぞ幸せそうにみえるだろう。しかし、人間によって籠の中へ入れられて養われている小鳥を、幸せというべきか不幸というべきか。

朝太郎の娘、萩原葉子さんの「蕁麻の家」は、その答えを明確に示している。女たちは「手と手と」を結び「互にやさしく抱きあふ」どころか、家という鳥籠に閉じこめられた女たちは、お互を憎み傷つきはてている。女たちの寝台もまた蕁麻にみちていることをよく証している。葉子さんが、自分の仲間の小鳥（女・祖母）にのみその憎しみを向け、朝太郎を善玉としているのが私には何とも悲しい。男は籠の中の女を愛する。しかしそれはベットの愛にすぎない。小鳥（娘・葉子）が死ななばかりに苦しんでいても、人間（父・朝太郎）はまるで無縁の世界の住人である。男と女のこの分断された苦しみは、一体いつまでつづくのだろうか。（法政大学教授・日本文学）

投稿随筆

たていといと
よこいといと



ある点景

新潟市

新井光子

冬枯れの景色の中で、地味ではあるが、その一点だけが美しく僅かに華やいで見えるといつも思う。

裸になった柳は何の飾りもなく、ただ、思い思いに広がった枝の先端だけが何か意志を持ち、全体の構成を図っているかに見える。そんな柳にモズが一羽止っている、もうそれだけで一つの生きた世界を感じさせられて、どこかへ飛び立って行くまで飽かずにながめていたりする。その消えていく先を確めながら、ああ、今日も松の疎林に入ってしまったと安堵する。

吐く息が白くなる頃に姿を見せ、暖かい陽ざしにかげろうが揺らめく頃には、またどこかへ行ってしまふ。人も自然もじつと内に向かっている季節に、彼等だけは厳しい生活を取り組んでいる。そんなところに心意かれてるのである。吹雪の中でじつと耐えながら、獲物を探える機会をうかがい、正確に行動する。その時の小気味よいシャープな姿にすっかり魅了されていると言う方が事実かも知れない。

枝に静止している時は心持ちふっくりとして見えるが、一度捕食の行動に移ろうとする時には、美しいと思える程の流線型がすつとはしる。それに比べて捕えることに成功した時の姿は、一種ふてぶてしい様子で美しさ

など消えてしまふ。

粉雪のふりまかれた氷上に安全着陸し、せつせとつ突き完全に動かなくしてしまふ。鳥の側からすれば当然であり、採餌本能としての習慣がそうさせるのである。あまりにも確実な嘴の動作はある種の不快感を残す。行動における正確さは残酷な印象を感じさせるものらしい。すぐには食餌とせず、見た限りでは、いつもハヤニエを作っている。目立たない場所の鋭い突出部や、折れた小枝、枝分れた箇所にはさみこんだり、突きさして完了する。失敗すると、落ちつかない様子で何度もやり直し、確信が持てるまで丹念に作業を続ける。

翌朝、かなりの積雪が、何もかも白一色に塗りこめてしまっている。モズは例の枝にじつとしている。小止みなく降る雪があたりをほの白く見せている中で、くもったガラスを丸く拭き取ったように、鳥の姿だけをボツと浮き立たせて、地味な色合いを鮮やかに描き出している。

その顔は、粹な歌舞伎役者程ではないが、隈取りをスッキリ入られて、なかなか美しいのである。胸から脇腹にかけてのほのかな茶色は茶人好みの和服の裾まわしを思わせる。灰色がかつた黒と、ほのかな茶色との組み合せに、ハツとするような白が一点して生き生きとする。造物主の巧みな配慮に、うっとりとするひとは、何ものにもかえがたい陶酔の境地を彷徨させられるのである。

卒業

逗子市

石原宗里

横断歩道にさしかかった時、娘は「急いで」とつぶやき温かい手でぎゅつと私の手を握り小走りになった。何と成長した事であらう。いよいよ小学校の卒業を迎えるのだと思うと、ふっと熱いものがこみあげた。小さな汗ばむ手をつなぎ、不安と希望を持って校内をくぐってから六

ケ年、四十二才で初出産をした私にはやはり待たれた長い月日であった。

親としてバザー、運動会、プール掃除、自然教室の草取等、学校行事の奉仕活動参加には、決して有終の美を飾り終せたとはいえない。

「私のお友達のお父さんお母さんはずっとずっと若いよ」と娘から何遍きいた事であろう。

高年妊娠障害と老化現象なのか背髄変形になやまされ、高いコレステロールで健康をそこねた数年でもあった。でも朝の弁当作りとベッド直しは、親としての喜びをかみしめ、子供の成長を祈る一時であったとも思う。

今日は、三浦自然教室に、「新しい道作りに出かけるのよ」といそいそと出かける娘は、ついつるてんのブレザーに、使い古しのバッグのいで立ちで楽しそうに門を出ていった。

此の間の日曜日、娘が主体となり飾飾りをしていった。今迄脇役であったのと思うと喜びが再びわき出て来た。

人間形成の基礎である幼児期、児童期に培われた良識、常識、判断力の上に蓄積され行く学力への扉の門はまたくぐらねばならない。

時には全速力で走り行くであろう。今度は手を離し見守り、出迎え、折々青空を見上げ、自然の美をとらえる事の注意をうながしたいと思う。

「人生の一日」

茨城県

野口欣子

久しぶりにのんびりしようとお実家に帰っている娘のけたたましい声があった。

「お母さん早くター君おしっこ顔よ」 やりかけの仕事を放って私は走っていった。両手に孫をかかえて用をさせようとして私ははっと胸をつく熱いものに我を忘れてしまったのである。二十八年前生れた長男がはじめておしめをとって抱えた時のあの手ざわり、長女の時の

あのやわらかい足の間を今私は孫の肌を通して想い出したのでした。

そう、あの時日記にこんな事と書いた。「母親にしか判らない此の手ざわり、この子の肌の手ざわりを私は一生忘れまい云々」とそれから二十何年、入試就職、結婚と、いろんな事があつた。喜びに笑つた時も病気になつて心配した時も私はこの手で覚えていた感覚を何度想い出したか知れなかつた。反抗期時代に自信を失い涙に負けそうになつた時もこの手をなで乍ら頑張つたものだ。そのなつかしいぬくもりの思い出を私は今、取りもどしたのだ。うれしく懐かしかった。育児の不安と責任の大きさのためか二人の子供達は何だか軽かつたように覚えていたが、孫はとつても重くて手がしびれそう。これも年のせいかしらなどと我を忘れていたと、「お母さん、どうかしたの」という娘の声にはつとすると、私の手の中で孫が「ナイナイナイナイ」とあばれていた。

真実の言葉

市川市

鞍智美知子

主婦になつて十五年経つ。今頃気が付く方が可笑しいのだが、最近になつて、やつと気が付いたことがある。それは、「主婦はお世辞しか言われたことがない。」という事だ。

勿論、主婦をダメと言い、愚かと言ひ、半端人足だと唾う声はあらゆるメディアを通して巷に満ちているのだが、所謂、なまの声として主婦個人の耳に届くことは決してない。

主婦同志横に並んでお互い共通の標的に対して何かを言う時には、えげつないまでに本音を語るのだが、いざお互いが向き合えば、もうそこにはお世辞以外の声はとび交わらない。それを常識と呼ぶ。そして礼儀と言う。社交辞令を社交辞令として聞いている間は、或いは言っている間はいい。私が遅まきながらや

つと気がつき、怖いなど感じたのは、真実を云って貰えない不幸にすら気が付かないという事だ。否、そんな事は決してありません。夫は常に私を正当に批判し、正当に評価してくれ、また、という人も居るだろう。私は決してお世辞など云わない、と云う人もいるかも知れない。果してそうだろうか？ 憎しみあって、他人同志になつてもいいという夫でなければ正当に批判するといふ事は出来ないのではないだろうか？ 正当に評価の方向はどうか知らない。

子守歌の様に耳に快い言葉だけで生活しているとつかそれか正当な評価だと錯覚し、自己を過信してしまう。だから、稀に悪意からか善意からか本当の事を云ってくれる人がいると不当な批判だと成るのである。誰でも痛い思いをするよりは甘い夢を見ての方が好きだから目を開くより、つぶっている方が楽だから。

どんな場所でも、どんな相手からでも少なくとも会話が成り

立つ人間関係の中にあつては主婦はいつも糖衣錠しか飲まされる事はない。世の中全てそういうもので、それが大人の社会だといふのなら、それはそれでいい。

言葉と自分は無関係だと割り切れるなら、(実に寒々とした生活感覚だが)言葉に依つて自分が蝕まれる事はないだろう。生涯、真実の言葉を持たないだけのことだ。

一切の虚飾を除いて自分を見つめる時、無力な、無知な、自分を見出す。一切の虚飾を他に対して云うまいと思つた時、主婦は、おそろく寡黙になる。成らざるを得ない。

そこからの出発を、私は成長と呼びたい。拡大鏡で自分を見ないこと。自分の耳で聞くこと。自分の目で見ること。自分の心で考えること。みんな当り前のことだが、その自分が永い間の「お世辞」に依つて構築されている事を見逃がしてはいないだろうか？

あまりにも日常的な、あまり

にも普遍的なことだから。本当の事を云える、本当の事を聞ける強さを、私は持ちたい。

僕の味つけ

尾道市

永井敬子

ママを怒らすと塩辛い料理を食べねばならなくなるのだ。だから、ママに口答をするのはよした方がいい。ママは常に正しいのだから、勝手な言い訳などきけないし。ママが僕の失敗をまくしたてている間、だまって、うつむいて、じっとしていれば、おいしいスープができあがる。いいのだ。それでいいのだ。スープに関する限り……。

私の願い

高知市

田原多美子

「今日はちよつと頭が痛いわと私がごぼしたところ、六才の娘が「お母さんがごはん作れなかつたらおばあちゃんが作つたらいい。でもおばあちゃんも作れなかつたら困るね。だつておじいちゃんもパパも作れないから……。」といひます。「あら、男の人だつてごはん作れる人居るよ。エミちゃんが結婚するとしたら、お料理してくれる人としてくれない人とどっちがいい？」と訊いてみました。すると「作ってくれる人がいいなあ、おいしいものを作ってもらつて食べて、わたしはお洗濯をしたらするの。」なんていひます。私は思わずニコツとしてしまいました。我が一家では完全分業制で、主人はまったく家事に手を出さないけれど、私のほうはたまに彼が作つてくれたものを



食べてみたいなど思うことがあ
るからです。またそれだけでな
く、主人もお料理をすることに
興味をもってくれたら、私たち
の共通の話題もふえ、生活にう
るおいができるような気がする
のです。私が作ったものをただ
「おいしい」といつて食べるの
ではなく、もし彼が作り方まで
興味をもってくれたら、「どう
いう風に作るの？」なんていう
ことから話がはずむのではない
かと思うのです。しかし残念な
がら彼の目下の興味は仕事、政
治、スポーツ、遊び（マージャ
ン、パチンコ）にしか向いてい
ません。まあ私も小学一年生の
娘一人の専業主婦ですので、掃
除や洗濯などを手伝ってほしい
などとはいませんが、食べる
事についてはもっと深い関心を
寄せてもらいたいと思うのです。
食べる事という限りない広さ
をもった事柄に、もっとつっこ
んだ話をしてみたいなどという気
持から、主人が料理に興味をも
ってくれたらと思うのです。最
近、「男子厨房に入ろう会」と

いうのができているようですが、
料理するということは、気分転
換にもなるし、本当に創造性豊
かな楽しいことなのだと思うの
です。

チューリップ

香川県

松田喜代子

私はチューリップがこんなに
も華やかで美しい花であったと
いう事をはじめて感じた。

チューリップといえは幼なき
頃、クレヨンで描いていた絵を
思いうかべる。小さな家とリボ
ンをつけスカートをはいた女の
子がいて大きなチューリップが
二三本ならんでいる。そしてチ
ョウが舞っているという様を
である。その当時から菊や桜の
美しさとは一味ちがう西洋のお
とき話への憧れのようなものを
チューリップにいだいていた。
にもかかわらず今までの私は鉢
植えのチューリップを眺める程
度で自分が活け、存分に楽しんで

だという記憶をもってはなかつ
た。今度、夫の注文中で病室が明
るくなる様な花を……というこ
とで五本の朱色のチューリップ
を活けてみた。かたく小さなつ
ぼみが二本とややふくらみかけ
ていたのが三本、外はふぶきの
日、暖房された病室に活けたチ
ューリップは、またたく間に花

ひらき夫も私も記録映画のフイ
ルムでもみている様なおもいで
見入っていた。聞いた花びらは
油絵具がたつぷりつかわれたと
いう感じでもとてあざやかなも
のであった。暖かすぎる部屋な
のですぐさま散ってしまいそう
に思っただけと昼間一杯咲い
た花は夕方にはやや丸くすぼみ
五日間たつぷり楽しむことが出
来た。燃えるような朱色がやや黒
味をおびてきた日、私は花びん
からとりだした。チューリップ
はあげられた新聞紙の上にバラ
リと音を立てて散った。全ての
花びらが同時に散り一瞬の間に
丸坊主になってしまった。白い
部屋を華やかに移ることが自分
の使命とばかりにつややかに咲

いたチューリップの美しさが心
に残った。

イヤリング

東京都

西村香那子

一つ失くしてしまったのですね
いいえ これははじめから
一つしかないのです
二つなければ飾りにならないな
んで
そんなきまりないでしょう

去年の夏海辺で捨てた
ただのガラス玉に
工事現場で拾った鎖をつないで
こわれたイヤリングに
ぬい糸でつないでみただけです
皆が注目しました
やっぱり素性的に見えたのです
しきたりを破ることは
いっだって素的なことなのに。

今回は、去る三月四日、東京都の教育会館で行なった公開継続ティーチインの一部を掲載します。出席者は二十一名、一読お気づきのようによ音だらけの論議の連続でした。

しかし家事について、主婦の自立について一致した結論の得られる状態からはほど遠い現実も、ますますはつきりしてきたようです。率直な感想をお寄せ下さい。

(編集部)

■自分で選んだ主婦業に
に文句を云うな

司会 最初に、主婦のやつてる労働……家事です。ね……これがおもしろいかつまらないかいろいろ議論がありますが、ともかく値うちがあるかないか、その辺から入って見たらどうでしょう？ わいふティーチインへのご投稿に、「誰もが忌みきらう家事」ってあったので、ちよつとびつくりしたんです。

A 家事の好きな人があってもいいと思うんで

すよ。でも男の人なら、いろいろな仕事を選べるでしょう、新聞記者になりたいとか、肉体労働がいいとか。

それが女の場合、選択できないからいやなんじゃないかと思うのです。ほとんど皆、女は主婦になって、家事労働をさせられてしまうから。B 私、ふしぎに思うんですよ。どうして結婚するときには選ばなかったんですか。

結婚しても仕事を続けようと思って、そうしている人は多いし、家庭に入ろうときめたら、その時、家事労働を選んだわけでしょう？

自分で決めたことに対しては、もつと責任を持つべきじゃないかしら。自分で選んどいて、好きだのきらいだのいうのはおかしいですよ。

A 職業持って、結婚後もやつてる人というたとえは先生なんか多いです。その先生にしても、家に帰れば、旦那さんは何もしないで、女が家事を担当しているのね。それはおかしくないですか。

C そういうことも十分覚悟の上で、その上で尚結婚をしたわけでしょう？ 今は選択できる自由があるんだから。

司会 女の人が、これだけ大ぜい主婦になるという事実は、自由な選択の結果だと思いい

になる？

D かなり選択的なものがあると思います。なぜならば、女は結婚したいという気持があれば、それは家事労働を一応するという前提がある。だから家事をするのは当然ですよ。

C 結婚と家事を、どうしてそんなに結びつけるんですか。それおかしいと思います。結婚するとき、相手の男とあらゆる話し合いをした上で、するかしないか決めたらいいんです。それができるだけの自由を、今の私たちは持つてゐるはずですよ。

子供を生む生まないだつてそうですよ。それを、結婚してからこんなはずじゃなかった、なんていうのは、甘いし、無知だと思う。主婦の立場がどうかという問題じゃないですよ。

E 今の社会には、結婚したら男は生活費をかせぎ、女は家事をするという位置づけがあるでしょう？ そういう慣習の厳然としてある社会の中で、お二人の仰言るように、自由に選べばいいという事で話はすむのかしら。

D 女はまず自分自身を解放すべきなんです。自分で戦わないところに、どうして進歩があるんですか？ それをしないで、主婦はつまらないと言っていたつて、しようがないじゃないで

すか。

C もし自分の選択がまちがってたと思つたら、自分の夫を変えることです。力一ぱいぶつかつて、あらゆる努力をし、話し合つたりいろいろすべきですよ。結婚してみたら夫が意外と古風だった。自分の思い通りにならない、なんてときに、すぐ社会がどうこうというのは、女の甘えですよ。

司会 個人的努力で殆どが解決する、というわけですすね？

■自由に選んだ

つもりでも……

F 私の場合、ちゃんと結婚のとき、家事は分担するという契約をしたのですが、それがダメになつた事情を……(笑)

私は図書館につとめてましたので、土日勤務がありました。夫は土日は休みなので、こちらとしてはつとめから帰つたときに、家の中がきれいになって、食事くらい作つてあることを期待します。ところが帰つてみると、朝私が出ていったときと同じ寝床に彼は横になつて、(笑)かわつたことといえば寝返りを打つたことくらい。(爆笑)

お互いに契約していても、それまでの教育と

いうものがある。こちらは孤軍奮闘で戦っているのに、むこうは男社会全部を味方にもっているのです。でもまだそのころはよかつた。

夫の転勤で私は失業しまして、やむなく専業主婦でいるわけなんです。今度は彼のほうが遠距離通勤になり、一時間半もかかるので、とても疲れて帰ってくるのです。それに押しつけるわけにはいかないし、そういう勤務の状態、その他、これは社会的な事情だと思ふんですが、それによつては、個人の努力だけではとてもどうしようありません。

D 私の妹の結婚もそうで、はじめ契約したのに、だんだん妹がするようになつちやつた。あなたへんねー、と言うと、やっぱり神経の太いほうが勝ちよというんです。散らかつた中にあるのが我慢できなくて、掃除してしまつとだんだん押しつけられちゃうつて。

だからやらなきやアいいんですよ。やるからいけないんです。

F 私は地方都市にいたせいか、夫に家事を手伝わせるというので、悪妻だというものすごい評判が立つてしまひましてね、離婚されるだろうとか、ダンナが逃げるだろうとか……そういう圧力もなかなか無視しにくいです。

D それは、私だつてさんざん言われますけど、亭主は逃げませんわよ。(笑)

F うちもまだ逃げてません。(笑)

D 私は今は専業主婦ですから、家事はもちろん私がやります。亭主は三人分の食いぶちを稼いできているんですからね。

最初のころは私も働いていましたから、したくないことは絶対しませんでした。あまりの散らかりように、亭主が呆れて、腹立てて家出したり、自分で片付けたりしてましたが、私は絶対へこたれなかつた。亭主が出ていきなければ、出ていかせればいいでしょ。(笑)

G やっぱり、ぐちを言う前に個人的努力が必要だというのは正しいと思います。

そのやり方としては、今おつしやつたように話し合ひとか戦ひとか、神経戦だとかいろいろあつて、自分に適したのでやっていけばいいと思います。私のはだましながらやるという方法です。はじめ共働きをしましたが、子供が生まれたら私が勤めをやめて専業主婦になるという暗黙の契約をしてました。

私はもともと怠け者で、子供が生まれても共働きを続ける意志はなく、英語を教えるとか、翻訳をするとか、家でできる仕事をするつもりだつたのですが、その場合、私も主婦だけでなく自立します、ということを押し出すのでなく、家事の合間にやるという形でやっていくと、亭主としては、「うちのヨメさんはテレビ見ないで

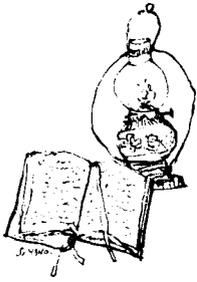
本読んでる、洋服を買うかわりに通信教育をする」というふうに、良妻賢母の延長として認められるようになり、たまには子供と留守番など協力してくれるのです。

学生時代は、こういうやり方はほんとうの解決でないと思っていました、実際にやってみるとなかなか効果のあるものです。

ただ、そういう個人的努力のほかに、連帯ということとは絶対必要で、もしもう少し家が近ければ、Fさんなどと子供を預けあったりして協力できるのですが。まず自分ができるところをやること、それに連帯の輪を広げることの必要を本当に感じます。

B 私は、今、Z会の数学の添削を、家でやっているんですが、チビが二人いるのでたいへんです。彼がいる時は、それまで何もしなかった人なんですけど、食事のしたくを手伝ってくれたり、子供をみてくれたり、いろいろ手伝ってくれるようになりました。

やはり何かを始めると、男の人もだんだん手伝ってくれるのではないかしら。



■女は三人前働かなければならないのか？

司会 今までのご意見の中で、まず取り上げたのは、個人の解決で努力できるという考え方ですね。

女の職業選択の巾はとてませまいのが現状ですが、それは女が選択しなだけ理由でしょうか。女ははたして自由なのか、つきたいと思えば男なみに、何の職業にでもつけるのか。

そこをまず議論していただいて、第二に、結婚すれば家事をするのがあたりまえだつて話が出ましたね。はたして家事労働は、結婚の本質なのか。このへんを話し合っていたらどうでしょう。

B 女の人はいたい二十四、五歳で勤めをやるのがふつうで、少くとも経営者側はそう思っている。だから学校にも募集が来ないわけ、選択の自由はあまりないと思います。

私はプログラマーしていて、ある程度専門的なことを任されていますが、男性との決定的な差は、上に上れないということなんです。それは男の人のように専門的な勉強ができない。これは決定的なのです。

司会 勉強できないというのは、家事のため？

B ええ。まあ、早く起きてやればいいんで、今女性でスペシャリストになつてる人は、皆そういう人なんですけれども、私はどうも、寝るのが好きで……怠情なのがいけないという反省はありますが……とにかく勉強する時間がない。それならといって、いい加減にやるのもつまらない、と思つてやめたのですが、社会へ出て働くためにはやはりそれだけの覚悟がいるわけで、職をよこせといっても、実績が上げられなければ職場は開かれないと思うんです。

D そうですよ。例えば公務員で、女の先生はものすごくきらわれるんです。なぜなら勉強はしないし、育児休暇はとる。それも二人までなら許せるけど、公務員がですよ、三人も生んでそのたびに休暇をとつてごらんさい。女の私でさえ腹が立ちますよ。いくら子供が好きでも自分が働いているということを考えて、一人か二人にとどめておくという理性も必要ですよ。子どもがいるという逃げ口上で、怠情で何にもしない女の先生が日本中に溢れてるんです。

K そんな怠情な女の先生が溢れているんです。ようかね？ 少しかかしく思いますよ。

D 私がいいいたいののは、個人個人の努力、自覚があればということです。

女のスペシャリストというのは、すごい努力をしますよね。人の二倍も三倍もね。でもそ

うという人の足を、その他大勢の怠惰な女が引張る。

女だって教員などの職があるなら、子供のことで休んだりしちゃいけませんよ。その人がプロならね。(会場騒然)

E 育児の負担を奥さんが皆しよい込んでるから、怠けているようにみえるので、じつさいには家の仕事と公務員なり、社会の仕事と両方やってるわけです。もしご主人が、三分の一、四分の一でも手伝えば、女はそれほど仕事をさばらなくてもやっていけるんじゃないですか。

男の方も子供が病氣したときは休みをとるというようなことが常識になれば……。

F ジャーナリズムで女教師の問題が取上げられる度に不思議に思うのは、女教師の夫に訴える、という考えがどうして出てこないのかということなんです。私が思うに、一人の人間は一人前の仕事しかやれないのが当たり前で、二人前も三人前もこなすというのは男でも女でもむりですよ。

司会 今、どうしてダンナに家事をやらせないかという話が出ましたが、私の亭主は母親に仕込まれていて、ずいぶんできるんです。私も、彼が働き私が家にいるという分業でなしに、家庭をやつていこうということで結婚したんですが、社会に出れば男というのは朝から晩まで追

い使われるんです。社会という組織の中で、出世なんてことはあんまり考えなくても、怠ければまわりの人に迷惑をかけてしまうんですね。そういう状態で自分の仕事の責任をちゃんと果しながら、家事をどれだけ手伝えるか？

私の実感ではね、自由に選べると仰言るけど現実には選択の巾は非常にせまいという感じですね。もちろんこの現実を破るのに個人的努力が大切だということはありますが、それだけではないかない。

何しろ、そういう亭主であつてさえ、私がか家事をかぶらなければ、やっていけないわけですから一たん入つた会社をやめて、閑職につくという路線がなぜ選択できないか、でもそれはいろいろどやさしいことではないです。

男の人は社会に出て働き、女は家にいて家事をするという、社会のシステムが変らなければ、大多数の人は選択の自由を持ってないだろうと思います。

■結婚と家庭

それはただの重荷？

I 最近若い方がいろいろ不満をおっしゃるけど、その不満を解消するためには、たとえば国が、子供を育てるために勤めに出不来ないお

母さんに、育児手当を出すこと。

私の家には、寝たきり老人が五、六年おりましたが、ほんとに何も出来なくなつてしまうのね。子供よりもつと深刻なんですよ。保育所はあつても保老所はない。寝たきり老人を抱えた主婦に、国が手当を出せば多少のことは解決するのじゃないかと思つましたよ。

司会 よく障害児を持つたお母さんが心中するでしょう。あれも、たとえば月に三十万くらいも手当がつくとなつたら、死なないですむ人がそうとういるんじゃないですか。

老人の場合もそうですな。

I ええ、私もほんとにノイローゼ気味になつて、窓を開けてキヤーと声をあげたいときがありましたね。

一同 そうでしようね！

I でも今考えますと、その中で自分が練れてきた点もありますし、自分がやがてそうなるかも知れないときの立場とか、得る所もありましたけれども。

B 家において何もすることがないとか、生きがいがないとかいう人が、どうしてそういう人の手助けをする、というところに、目が向かないのでしょうか。

H かなりそういうボランティア活動、やってるんじゃないですか。

B かなり出てきてはいるんですけど、やはり何もやることがないという声がすごく多いようですね……。

司会 ボランティアというのは、私もさんざん教育運動をやってきたんですけど。やってみてよく分ったのは、こういうことやれる人は、旦那様が高給取りでなければだめだということ。経済的に、ちよつとでも問題が起ればみなぬけてしまいますよ。

アメリカでボランティアがさかんだというのは、中産階級の層が厚いことにあるんじゃないか。日本の社会で中産階級に、そこまでの安定があるかどうか、疑問がありますね。

T やっぱり、社会の横のつながりがあるから、かなり意識して作っていかないといけないと思うのね。今までのタテ社会、家族制度というものは全く崩壊してますからね。

I そうですね、家がありましたものね。

J 社会がガラッと変っちゃって、それにかわる新しい人間的連帯というものが今やまったくないと思うんです。

K 制度としては、たしかに家族制度は崩壊したけれど、意識の中ではちつとも崩壊してない。そこが問題なんですね。痛切に感じます。

いろんな意見がありますが、老人のほうから、自分の土地などを子供に託さないで、公に

出して、そのかわり老人ホームに入れてもらうなど、今までの価値観を変えて、新しい発想の出でくる可能性はあるんですね。

F しかないまだに老人のめんどう見も家庭の仕事だから、主婦の仕事ということになっていきますね。

司会 たいへん深刻な話が出て来たんですが……。その老人の世話も含めて、結婚すれば女が家事をやるのが当然なのか、さきほど当然だということ意見が出たのですが、結婚というものの中味は、そういう日常生活の役割だけなんですか。

C 私たちが、結婚生活十年にしてやっと得た結論というのは、家事をどっちがするとか、どっちが給料とつてくるとかいうことではぜんぜんなくて、お互いにもものすごく大事な相手として、責任をもって、お互いに育てあっていくことで、それ以外の何もものでもないと思います。

A 理想としてはそうだと思うんですが、私はすごく現実的で申し訳ないけれど、結婚生活にとても不安を持ちますね。それは主人の働きたけで家庭が支えられてるってこと。

主人が突然交通事故にでもあったら、明日からほんとにどうしようかと思えますよ。保証は何もないでしょう。家事や子育てをいくら一生けんめいやつても、水の上に浮んでいるにひと

しいということ、皆さんどうお考えなんですか。

C それは夫も同じことでしょう、妻に死なれたら困るといことは……。

A 同じでしょうか。妻の方は全く違う稼働という世界に入って行かなくちゃならないのに……。

L その時はその時で何かすればいい。

B 保険をつけておいたらいいんじゃない？(笑)
C でもその時までの自分というものが全くなくなると思う。

F それ、とてもよくわかりますよ。私は離婚計画と未亡人計画と二つ持ってたんですけど、未亡人計画としては生命保険。(笑)それに国民年金の母子年金部分というのが入りますね。ところが離婚となると何にもなくなるんですね。

食べてくために、一しよにしなければならぬ状態、夫婦ケンカをしても、本当のケンカにはならないですよ。背水の陣でやらなきゃならないとして、そうなるど頭で浮ぶのが自分の儀の預金通帳だったりして。(笑)

司会 そうなつたら、主婦が今までやってたことは全然役に立たない。

K 一生けんめいやつてればやつてるほど役に立たないわね。

■自立は

愛情と矛盾する？

C 私、こういう議論でいつもふしぎに思うのは、夫に「あなた手があるんだから自分で取んなさいよ」ということがすく進歩的で、私みたいな思わず取っちゃうのが古い女だといわれることなの。

G 力関係と惚れた弱味というのを混同してるからだ、と？

C そうじゃないの。今の私たちの一番忘れてるのは、女が自立しなきゃいけないとか、女も男と平等にならなきゃいけない、ということばっかりいすぎて、一番大事な、心ということばな、それを無視しすぎているような気がして、とても情けなく思うんです。

男、女にかかわらず、人間はもつとやさしかったはずなんです。今私、子供をコツコツ育ててきて、ほんとに夫に感謝してるんです。感謝してるってことさえ、誰かにいわせれば従属的だということになるかもしれないけど。

夫が、生きてる間はとにかくお金を持つてきてくれるから、私は経済的なことは何一つ心配せずに、ありあまる時間を子供と自分のために使える。それを素直に喜んでるんです。

司会 亭主が金をかせいできて、自分たちになくな生活をさせてくれるから、感謝する、ということですか？

J 心を大切にするからこそ、もつと自立を考えなければいけないんじゃないかしら。本当のやさしさっていうのは、養われている立場からは出ないと私は思うけれど。

司会 こちらの方、お帰りのようですから一言、おっしゃって下さい。

L 結婚とは何かとか、主婦の仕事に生きがいがあるかとか、机上の空論をいつまで続けているより、私にとっては、どうして今の専業主婦を否定する方向にいけるのかという、選択方法を少しでも知りたいんですね。家事に生きがいがあるうとなかろうと、とにかくそのことで時間をうめたくないんです。ハッキリ言つて。とにかく今から行動するための知恵を少しでもおかりしたいんです。

(紙面の都合で、ここまでしか載せられないのはたいへん残念です。結婚と家事、女と子育ては一体のものなのか、夫と妻の財産関係、若い人の意識など、主婦をめぐる多様な議論が展開されました。残りの部分を、何らかの方法で、またご紹介したいと思えます。

編集部)

投稿規定

予約購読者(会員)は、どなたでも投稿できます。投稿は原則としてすべて掲載します。

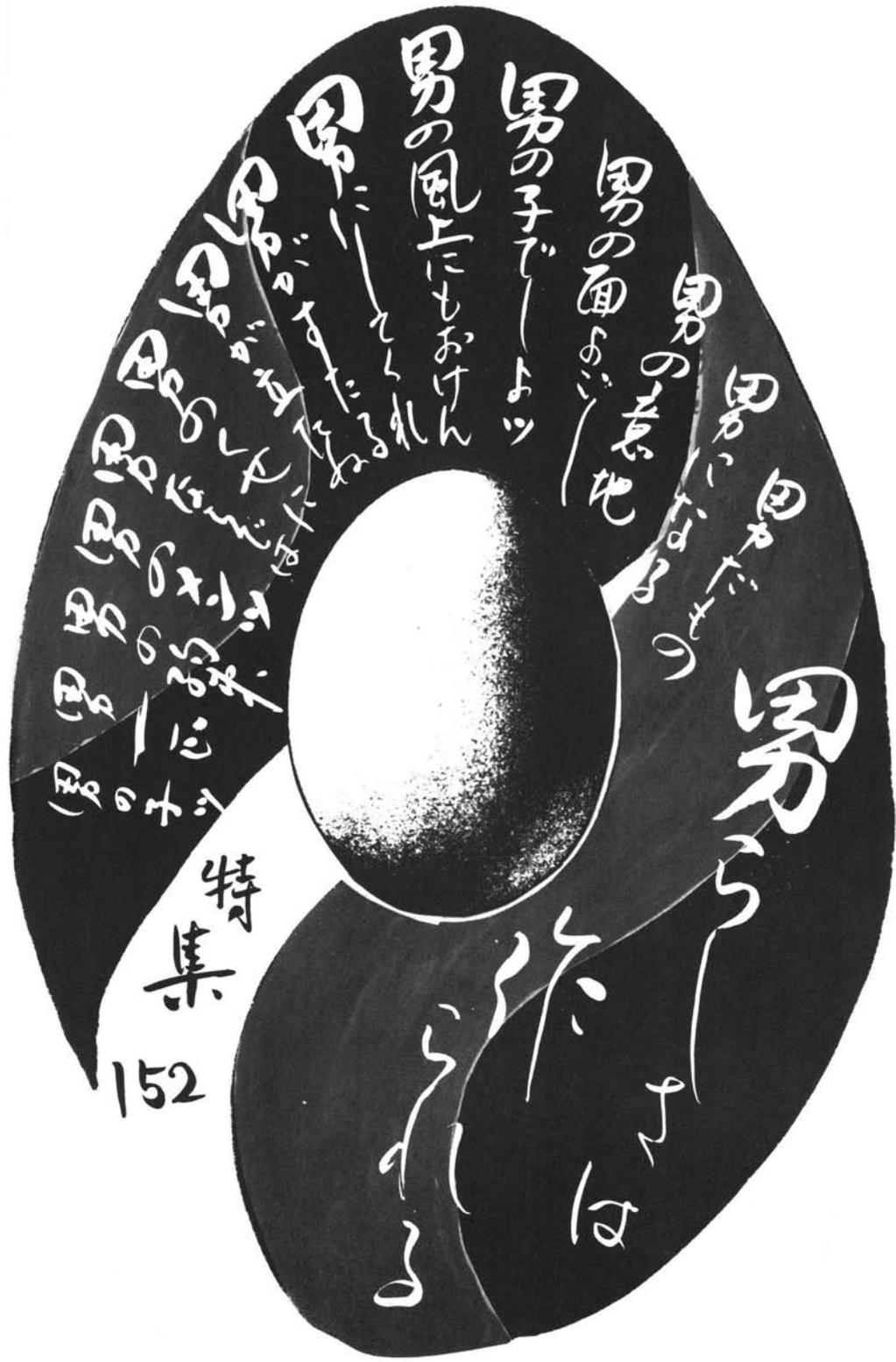
(一) 随筆・随想・テーマ自由
千二百字まで。

(二) わいふティーチン
特集テーマ原稿
千二百字まで。

(三) おしゃべり、その他
五百字まで。

(四) 持ち込み原稿は、形式、内容、長さ自由。ただし掲載は編集部で協議の上決定します。

「わいふ」は、会員の皆さまが創る雑誌です。しかし限られた紙面の都合上多少選択することもありますのでご了承下さい。



男の風上にもおけん

男の子でーよッ

男の面よーい

男の面よーい

男の面よーい

男

男の面よーい

男の面よーい

特集

152

男らしさへのあこがれ

夫に男らしさを見た時

柏市 徳光利子

私たちの子育て時代に、男の子がメソメソ泣いて帰ったような時に、「男の子じゃないの、男の子は強いものよ」と、叱ったものです。今考えると、そのような言葉の中に「男らしく育ってほしい」という願いが、こめられていたようにも思われます。

先ごろ、友人が「うちの子供は覇気がなくてケンカの仕事も分らずに困る」と、こぼしていたことがあります。聞けば一人息子さんで、兄弟の味も知らず、すべて優等生で、あまり叱ることもないらしいのです。

そう言えば、このごろどこの家庭も、いわゆる核家族が多く、子供も一人〜二人といった構成で、昔のように多くの兄弟姉妹が、切磋琢磨するといった光景は見られません。持って生まれた性格もあるうけれど、成長する段階で、「より男らしく作られる」と言うようなこともあり得ると思うのです。

さて、身近かなことで恐縮ですが、話はずっと昔にさかのぼり、夫が労働組合に関係していた時のことです。丁度、組合の分裂騒ぎがあつて、殆んどの方が第二組合（新組合）に加入してしまつたのです。いろいろな方の

勧誘にもかかわらず、最後の一人になるまで頑張りとおした彼を、何と頑固なと思つたものです。

そんなある日のことでした。テニスに向い一点を見つめ、しきりと考え事をする彼の目に、美しい緊張感を発見したのです。一心になつて一つの事を考え、果敢な行動を起す時、そこには男性としての美しさが漲るものだと、今でも時折り懐かしく思い出しています。要するに男性が一つの事に体当たりする時、はたから見ても、一番素晴らしい男らしさを感じるのではないのでしょうか。

そして、年齢的に言つて、男の子は殆んどが結婚独立をしましたが、家庭にあつても常にグジグジと細かいこととは言わず（特に経済面）、配偶者を全面的に信用してまかせ、自分の為すべき道をまっしぐらに進むような、フアイト・マンになつてほしいと思います。

もちろん、配偶者の方も、それに答えられるような社会常識を身につけてほしいとは思いますが……。

男らしさへのあこがれ

アラモとアラビアのロレンス

伊東市 高野香枝子

どちらも女はほとんど出てこない男の映画である。どちらも何回みたかおぼえがない程だが、最近テレビで又みる機会があつた。

「アラモ」をみてから二、三日主題歌が耳について、そのメロディを歌うと一つの場面が浮かんできて、たかが映画に、と笑われそうだがその度にグツと胸をつかれてしまう。みる度に感じ入ってしまうのだ。

アラモの砦で、何万という敵軍に包囲され正規の軍隊は数えるほどしかいず、あとは烏合の衆だがテキサス独立の熱意にもえる男たちがたてこもる。くるはずの援軍が全滅したとの報が入って、婦女子に危害は加えないという敵の軍使の言い分に従い、女と子供を砦から退避させる。両軍の間を馬車がいくこの場面もいい。家族を見送る男たちの心情がにじみ出る。

砦の隊長は皆を集めて、君達は正規の軍人ではない。今逃れても誰も君達をせめるものはいない。希望者は脱出しろといって、砦の門をひらく。男たちは馬に乗り始める。しかし一つの隊をひきいるジムボウイが無言で隊長の傍らに立ち、残る意志を表明すると、待っていたように男たちは次々に馬を降り、ジムボウイに並ぶ。男たちは一人のこらず砦に残る。何十倍かの敵に包囲された砦に最後の夜がくる。

忘れがたいのはこの場面だ。アラモの主題曲が流れる中に、男たちの心が次々とうつし出される。明日は死ぬだろう最後の夜を物思いにふけてそれぞれが、それまでの野卑な男の姿とはうってかわって静寂の闇にすわって眠るものもない。荒々しい男たちを美しくみせる感動的な場面で、男が作った映画だなあと思わせる。

「アラモ」はジョン・ウエインという西部劇男の監督

だけあって内容は骨ばいがストーリーも単純だ。最もこれは実話だが。

「アラビアのロレンス」になると監督も超一流のデビット・リーンになって、イギリス映画でもあり、イギリス人の話でもあり一筋縄の男らしさでは片づけられなくなってくる。

アラビア派遣のイギリス士官がアラブを愛しアラブ連合を独立させようとしてイギリスとアラビアの板ばさみに苦悩した揚句、イギリスの奸策にアラブを裏切る結果になり、失意のうちに砂漠を去っていく。

アラブ独立の夢破れて（しかもそれは故国イギリスによつて破られる）イギリスの軍服姿にかえったロレンスのジープが砂漠を走りぬける時、アラブのラクダ隊のそばを通る。思わずジープからのび上つて後方へとりのこされるラクダ隊をみつめるロレンス。

この映画を何度みてもここで泣けてくる。二度と砂漠をみることはないと思っているロレンス、生命をかけた壮大なあこがれと訣別するロレンスに、男の悲壮な孤独がにじみ出る。

私の感じる男らしさとは考えてみると、どてっかいゆめと、私利私慾をはなれた信念を伴う願望をもつ時の男の姿であるようだ。



男らしさへのうたがい

「らしさ」は作られたもの

坂戸市 高橋裕見子

「男らしさ」という言葉を聞くと、必ず思いだすことがある。それは女子短大にはいったばかりの五月。まだ新しい学校に馴染みきれない女子学生を前に、教師は「伊勢物語」四段を読んでいた。四段は、愛する女が后となつてしまったため、男は次の年の梅の花ざかりに、女がもと住んでいた家に行き泣きあかしたという話だが、教師は読み終えた後、「男が泣くということについてどう思うか」と質問された。教室が少しざわめいて、指名された学生が次々と答えはじめた。「泣くなんて男らしくないと思います」「平安時代の男性はなよよして男らしくないと思います」「じつと耐えることを男らしいのであって男が泣くなんていやです」出てくる答えはすべてこんな調子だった。名前も顔もまだよくわからないクラスメイトの声を聞きながら、男が泣くということについての答えがまったく同じだということが不思議だった。（よく考えれば不思議でも何でもなかったのだが）愛する人が手の届かない所に行ってしまったら、それが男であれ女であれ泣くだろうと私は答えた。

教師はひととおり学生の答えを聞くと、平安時代は、

自己の心を忠実に、素直にあらわすことが良いことと考えられ、男が泣いても少しもみつともなくない時代だったと言ひ、男が泣くことがみつともないとされたのは儒教がはいつてきてからだと付け加えた。「男らしい」「女らしい」という言葉に漠然とした不信任をもっていた私はその時とても明かるい気持になったのを覚えている。

私も含めてほとんどの学生の中にあつた、「男は強く決して泣いたりしない」こういった男らしさがつくられたものだとは、私を育てた両親、それから教育、環境、すべてこのつくられた「男らしさ」「女らしさ」を強要していたことに気がつくことでもあつた。けれども気がついたところで日々の生活は変わりようもなかつた。私のまわりでは、このつくられた「男らしさ」「女らしさ」が横行し、私の中では、二十数年も住み続けている「女らしさ」「男らしさ」が、意識しているのにもかかわらず、時々ひよっこ顔を出すのだ。それは、出さなくてもよいお茶をつい出してしまふ手であつたり、子どもに向けられる「あなたは男の子でしょ」という言葉であつたり……。

日々の生活はかわりようもないと書きつつ、それでも私の中にある「らしさ」を意識し続けることによつてかわつていくものもあるかもしれないと思つたりする。こんな混沌とした状態で手にしたのが「フェミニスト」という雑誌だった。この雑誌によつてはじめて「女性学」という学問があるのを知つた。「……女性学発生の基本

的な思想には、女性が社会活動のあらゆる分野から組織的にはみ出されてきたという歴史的差別の認識、そしてその差別を思想的に正当化し保護、維持してきた宗教・哲学・社会思想の分析、そして女性の視点・女性の歴史、文明への貢献を完全に無視してきた従来の学問への批判、及びその改正等がある。したがって女性学は、従来の学問の批判から始まり、歴史の書き直し研究のやり直しをあらゆる分野において要求するものであり、単に新しい研究分野の延長というに止まらず、必然的に現代学問の革命という性格をになつてくる。……」(「フェミニスト」創刊号)女をとりまくすべてのものの再検討が、実際アメリカの大学で行なわれているのだ。「伊勢物語」のあの時よりも、はるかに手ごたえのある「らしさ」からの解放を感じて、この混沌とした気持は改めて「らしさ」をつくりあげてきたものに向かいつつある。

男らしさへのうたかい

男らしさの呪縛を断とう

東京都 京野美枝子(29)

男らしさ、それは、男にとつて、人生のあらゆる場面において、強迫観念であつたり、勇気づけの特効薬であつたりもする。

男らしさとして、強さ、大胆さ、雄々しさ、積極性、

野生的、行動的など、まるで、原始時代さながらの条件だけれど、男は、皆、これ等を追い求めて、少しでも「男らしさ」に近づこうと努力する。

昔々、生きてゆく上で、男も女も身につけざるを得なかつたこれ等の条件を、今、男にだけ要求する確かな理由もない。

むしろ、心身共に重労働で、どんな仕事よりもすぐれた人材を必要とする子育てする女にこそ、これらは必要だ。(子育てを女のものとすれば……)

男だからとて、生まれながらにして、男らしさなる芽があるわけなし、人生のはしげで、男らしさを強要されたり、男らしさに、勇気づけられたりして育つてゆく男らしさは本当に、男の中に浸透してゆかない。

その空虚さに気づいているのか、こわしがたい男の友情なるものは、どうもその空虚さの穴埋めとしてあるように思えてしまう。

男だつて、大いに泣きたいし、甘えたいし、頼りたいし、弱気にだつてなる。

自分がないものを追い求めて、その空虚さにぶつかつた時、男の友情に名をかりて、なぐさめ合つたり、励まし合つたり、又、女らしさ(やさしさ)を求めて、ネオンの中に消えていったり、女をけなすことにより勇気づけられたり、又他人事ではないはずなのに、そんな男を見て、他の男達は、女々しいとか、女みたいだとか、女のくさつたのだとかいって自分をごまかしてしまふ。

もともと、男らしさなど、あるはずがなく、あるのは、

自分自身だけなのに。

男らしいと言われて喜び、女らしいと言われて憤慨する男たち。

女をいつも悪いもののひき合いに出し、男じゃないか、男らしくなれ、男なら……、やつぱり男だ、なんて「男らしさ」をエサに勇気づけられ、励まされれば、いくらバカな男でも、「女よりかはエラインダ」という気になるものだ。

女を見下すことにより、男らしさを保持し、女を自分達とは違う生きものであるかのように思い込まされてきた男達は、女を踏みつけ、閉じ込め、手も足ももぎとってしまったことにも気づかず、平気でいられる。

勇気を出して、いさぎよく、男らしさの鎖など、フツ切ってしまったら、ハツと我に返り、新しい自由が得られるかも知れない。

女達も「女らしさ」の囲いから飛び出してみたら、いまままで、出来ないと思っていたことも出来るかも知れない。

いかに、○○らしさのあやつる糸が、心の自由、行動の自由を奪っていたかがわかるだろう。ある人が「私、女を意識することをやめたら何でも出来るようになったわ」といつていた。



男たちの現実

弱いのは男では？

甲府市 風間ゆり

この頃、私のまわりの「わいふ」読者たちが集まるとよく「男の弱さ」が話題になる。私たちのグループは比較的年令が高く、三十代も最後くらいが一番若いのだが、結婚生活も相当に長く、結婚式をこした人も二、三人いる。その夫婦としての生活を通して、夫のすがたから、男の一般像を見出しているのです、かなりきびしい言葉が出てくる。

男って強いものと観念的に思っていたが、男ってなんて弱いもの……というのが、この頃の感じ方である。その弱さとは次の通り。

その一。生活力の弱さ、収入の多少の意味ではない。文字通り生きる力である。早い話収入源を失った時、次の生きるすべをどうするかということ。(停年時の頼りない男性)

その二。家族に対しての意外ともいえるべき無責任さ。失敗があった時その責任は、俺にないという態度。それをつくり出すために、日常生活の中で物事の決定を、妻、子どもなどの意志でしたかのように仕向ける。(これは割に多く、しかも知的水準の高い男に多いのである)

その三。日常性を欠いた事態に対する態度の頼りなさ。つまり一度変ったことがおきたら、万事「かあさんにまかせろ」と逃げてしまふ。これについては、夫の親をみるとる妻に「病む親父を見るのは辛い」と言つて、病院に見舞にも来ないという夫のことや、親を送る時期が目前と分つているのにわざと出かけて「臨終に立合うのはせつないから」という夫の話は幾人からか出ている。

その四。昔から女に友情は育たない、男にのみ友情はあると言われてきたが、現代の中年男に友情はない。この点はグループのほとんどの主婦が異口同音「夫の交際している人で心から打とけて話し合う人なんていないですよです」という。私が夫に聞いて見たら「男のつき合いは、利害関係がからんでいて、貸と借なんだな。ここで貸をつくつておく、いずれ利子がついて返ってくる……ってな具合だ。僕はそんなのいやだから、つき合わない」又他の夫は「時に一ぱいやろうという間柄までだ。うっかり本心をさらけ出すと、足もとすくわれる」と言つたそうである。

こうして見ると、男の弱さがいやという程でくる。勿論女房子供に食わせていく為に、みんな世間なみのことをやつて行く他ないのだ。それを弱いと文句つけられるなんて……と怒るむきもあるだろう。が私の言いたいことは、完全に組立てられた社会、それも男だけで、組立てられている社会の枠組の中の男のパターンは、もうきまり切つており、それからぬけ出すのは容易なことではない、という事なのだ。世の中のあり方で、男の男

らしきさは変つてくるのではないだろうか。

この辺で、社会の組立の中に女を加えてみたらどうだろうか。社会の要求する男のパターンが変わつてくると思ふ。女の女らしきさが、男社会の好みにあう様に作られていることにあきたらない私たちは、長い間の社会体制の中でつくられてきた男らしきさにも、あきたりないのである。今まであげた男の弱さをなくするような世の中を、女の要求として作り出そうではないか。

本当の男らしきさは

男らしきさは人間らしきさ

松江市 安達日南子 33

私は現在三十三歳。もうすぐ六歳になる長女、二歳の長男の二人の子供を抱えて共働きをしている。(ちなみに夫三十五歳、公立高校教員。私、公立中学校教員)核家族であるが、幸いに保育所、子守さんに恵まれ(上の子は三歳まで近所のおばさんの所、それ以後は保育所。下の子は目下近所のおばさんの所)普段は少々忙しいながらもどうやら張り切つて生活している。

今回は「男らしきさ」についてのテーマが設けられているが、現今世の女性達の間でかしましくかつ興味をもつて語られている「女が働く事」に関連させてその相棒をつとめる男の男らしきさについて書いてみたいと思ふ。

我が家では保育所等子供の送りむかえは夫がするし、掃除、洗濯は夫の領域、私は専ら食生活の方に関与する。むしろ掃除などは、四角い部屋を丸く掃く私より、徹底主義の夫の方が向いているし、夫自身も自分できれいにした方がよいようである。私は食生活の方でさえ、夫が自分で作れるようになった方が便利じゃないかと思っている。(それというのも私が仕事で時々遅くなるから)

私の場合、職場が学校という点で比較的楽だからかもしれないが、別に「女だから」と意識した事はないし、男性教員も別に必死の形相で働いているとは思えず、私も男子教員程度に楽しく働いているつもりである。要するに職場と言っても大仰に観念的にとらえる必要はさらさらなく、肩肘張って精も魂もつき果てる場所ではないのである。職場による違いはあるにしても、女が働く事をそれほど大変とは思っていない。

私は、一人前の女が精神的、肉体的健康維持のために働くのは全くの当然だと考えているので、家庭生活の上でも特に男(夫)、女(妻)を意識していないのである。逆説的ではあるが、男だから女だからと区別せず常に自分と同じ人間として私に対してくる夫を私はかえって男らしく思うのである。世間の基準にとられない、人間味あふれる夫の言動を私は男らしいと思う。子供達のききわけのなさには時としては両隣りに聞こえる程のわねがねのような声で怒鳴る事もあるが、私の事を身体が弱いと思ひ込み(事実あまり丈夫とは言えない)子供達からさえも私をかばおうとする夫のやさしさを男らしい

と思う。子供の病気の時は、不必要なぐらい心配し、私の身体を案じて先に寝させてくれ自分は寝ずの看病をする夫の子煩悩ぶりを男らしいと思う。

私が夫に感じている男らしいさは、女とか男という概念にとられない根源的な人間らしさを備え、その面でのみ私に接してくれる事から発しているように思われる。

酒の肴に、鶏のワサネーズあえ

材料 鶏のササミ、またはテバ150〜200g

ちくわ(おでん用でなく細い焼ちくわ)三本

きうり 大きめ一本・ねぎ 3〜4cm

わさび漬け少々

調味料 酒、酢、うす口しょうゆ、塩、コシヨ、マヨネーズ、化学調味料少々

作り方 ①鶏は軽く塩コシヨー化学調味料をすりこみ、

フライパンに並べ、酒をふりかけ、ふたをして蒸し

焼きにする(弱火で)

②ちくわはたて二つ割にしてななめ細切り。

③きうりも細切りにして塩もみ、水気をしぼる。

④鶏は中まで火が通ったらさまして細く切るか裂く。

⑤わさび漬けとマヨネーズは半々くらいに合わせ、

うす口しょうゆを少々たらす。それを酢と、鶏を蒸

した時出た汁とでのばしながら、あわ立て器でよく

混ぜる。(味をみながら、辛すぎぬよう砂糖を加える)

⑥みじん切りのねぎと、②、③、④を⑤であえて、

盛りつける。あればもみのりなどのせて出す。

男らしさ

也徹見驚

学生時代、文化人類学の先生からこんな話を聞いた。その昔、ある人類学者がニュージーニアのひとつの村を訪れたら胸に朱を塗った酋長が現われた。そこで人類学者が「なぜ体を赤く塗るのか」と聞いたら酋長はこう答えたという。

「なぜって男らしいからさ。君はなぜ赤く塗らないのかね。男だったら男らしくやったらどうだい」

この話、いささか出来過ぎの感はあるが、男らしさといった発想がいわゆる「未開社会」にもあり、そのうえその表現の仕方は文化によって異なっていることを物語っている。

男らしさの表現の仕方の違いはとりも直さず男らしさが意味する男のイメージが文化によって違っていることを意味している。だから男らしさを論ずることはその社会の男のありようを考えることにほかならない。

「男らしさ」に限らず「学生らしさ」「子供らしさ」「銀行員らしさ」など「らしさ」という言葉はどうもうさんくさくて私は好きになれない。なぜかというところ「らしさ」の前に来る「男」なり「学生」なり「イメージ」がリアリティに先行している感じがするからである。リアリティによってイメージを形作るのではなく、逆にイメージによってリアリティを秩序づける発想と違っていいだろう。従って、自分自身を「らしさ」に近づけることはリアリティの変革から自分を遠ざけてしまうことにほかならない。

最近、伝統的な男らしさのイメージをつき崩すような現象が現われて来た。男性のための育児教室が開かれる。男たちがグループを結成して料理を作る。昭和ひとけた世代や大正生まれの男たちにはこうした現象は理解できないし、お気に召さないようだ。いわく「冗談じゃないよ、大の男がー」いわく「女みたいなことができるかい」いわく「男がすたるね」

彼らはそう言って嘆くのだが、彼らの嘆きは「取り越し苦労」のように私には思われてならない。ほんの一部の男性が育児教室に通っても、料理を作っても「男らしさ文化」とも言うべき構造は何も変わっていないのである。

日本の社会においては「男らしさ文化」のルーツはかつての家（イエ）の制度にあると思う。この制度のもとでは、長男として次男より先に生まれること、そして女より男として生まれることがアプリアオリに大きな意味を持っていた。この制度では長男は長男らしく、男は男らしく、そして女は女らしい行動が期待される。ひとたびその行動を逸脱すればさまざまな制裁を加えられたのである。

戦後三十数年、われわれはこうした意識をふっ切って生きていけるかというところではない。

神話としての

戦前の家制度の中の価値感、企業社会の中で連綿として生き続けている。

企業社会の中で男たちは家制度の中と同様にヒエラルキー意識を持って暮らしている。集団の中で自分を位置づけ、身分にふさわしい言葉と行動を取ることに多くのエネルギーを費やしている。ここでは、組織の中のハシゴを昇ることにチャレンジすることが男らしいとされるのである。

日本の企業社会の恐ろしいことのひとつは企業が男たちにとって唯一の世界になっていることである。企業の中でひとたび「仕事ができる」と認められれば社会人として優れているか、夫としてあるいは父親として責任を果しているかどうかはほとんど問われない。

自分をトータルな人間として考えず、企業によって全てを一元的にからめとられてしまうことをおかしとも何とも思わない。企業の名前を冠した「○○マン」などという言葉を嬉々として口にする人間に、私などは身の毛のよだつ思いがする。企業社会に自分をからめとられてしまっている人ほど男らしき意識を持っているのは興味深い。男らしいとされるスポーツマンを企業が採用したがるのは、この種の男たちは会社は何を言わなくても自分のアイデンティティを会社そのものに重ね合わせているからに他ならない。

男意識を持った男はたいいてい女を抑圧する。まず女の能力を正当に認めようとしな。女をはじめからだめなもの決めつける。人間的にも魅力的で、さまざまな可能性を持っているのに女であるが故に上司に評価してもらえないキャリア・ウーマンを私は何人も知っている。日本の社会は悲しいことに優秀な女を自閉症にさせる社会なのである。自分が男であることをふりかざす男は女にとって決して良いパートナーとはいえないだろう。成長過程においてひとりの人間としてよりも、男としての価値感を植えつけられた男は始末が悪い。自分自身を自立させ、解放することができない男が家庭で自分のカミさんをひとりの人間として見られるわけがない。口を開けば「おいメシ！」「おい、風呂！」ぐらいのコミュニケーションで亭主がつとまるのだから日本の男は楽なものだ。

男らしさを口にする男は不思議と女らしいとされる女を好む。これも相性のひとつなのだろうか。自分の意見や判断を持った女は「女らしくない」と、お断わり。何を聞かれても「まあね」とか「やっぱり」とか、答にもならない答を口にする赤ん坊がいいようである。

それにしても日本にはこうした赤ん坊が多過ぎる。彼女たちがろくろく教育を受けていないならまだしも短大なんぞを出ていてもこれぐらいであるところに日本の社会の貧しさがある。

いつだったかNHKで大学の応援団の練習風景をルポしていた。ある阪大の応援団では、団員同志が会

うたびに「ウォース、ウォース」と、動物のおたけびのような奇声を発する。それを見ていた女学生がインデビューに答えて言うには「いいですね、男らしくてー」こうした男たちは、集団の中で外的な強制力によつてやつとこき自分を支えていることを彼女は見抜けなかつたようである。

ところで、われわれはこうした男意識というものをどのような形で内面化していくのだろうか。それはまぎれもなく家庭環境、特に母親によるものであり、さらには友人関係、マスコミの影響である。

私自身は男らしさといったものをあまり強制されずに育つたほうではあるが、それでもがき大将とけんかをして泣いたりすると「男の子なんだから泣くんじゃありません」と、母親に言われたことを今でも憶えている。男らしいということは人前では泣かないことであり、そしてそれ以上に闘争において相手に打ち勝つことであることを、男の子はまるで海綿が水を吸収するように心に浸みわたらせていく。

男らしさの核になっているのはまぎれもなく力が強いことであり、スポーツがうまいことである。腕力もなく、運動も苦手なため子供のころいじめられたり、ひやかされたり、いやな思いをした男たちは多いに違いない。私も決してその例外ではない。大学に入ってワンダーフォーゲル部に入り、山登りをやり始めたのも子供のころの体験が潜在意識にあつたからだ、自己分析している。

力とスポーツに象徴される男らしさの神話はどんな男の心の中にも多かれ少なかれ生きていると思う。その神話を自分の心の中で制御することができず、自分自身を神話によつて裏切っている男がいることは不幸なことである。例えば、セックスの回数といつたことが冗談にせよ男らしさのシンボルとして男の間で話題になるのは力の神話に生身の人間の方が裏切られていることを物語っている。

子供の世界で意味を持つ腕力は、おとなの世界では経済力に姿を変える。ある官庁の若い人がこんな話をしていた。「ぼくは女房には働いてもらいたくないんですよ。外で働かれたら世間にはまるでぼくが養えないみたいに映るでしょ。男は女房のひとりぐらい養えなきゃね」彼は自分が作り上げた男らしさの神話を、違った光のもとにながめてみるという想像力を持っていないようだ。

男らしさの神話がはらんでいる危険性は、ひとりの生身の人間の心のあり方や生き方の多様性を閉ざしてしまうことである。男らしさのイメージをずっと追い続けるのも、「そんなこと男らしくないから」と、やりたいことをやらないのも、ともに貧しい生き方ではないだろうかと思ふ。

男が攻撃性を持つてゐることは一面の真理ではあるが、同時にやさしさだつて持つてゐるといふよりは社会化の過程で持つてゐることができるといふことを認識することは大切なことだろう。攻撃性ばかりを塗り込

めた男らしき文化だけを信じることは男にとっても、また女にとっても実りのないことである。

最近、若者の間で出て来た「やさしさ志向」ともいうべきものは、閉ざされた人間関係に落ち込まない限り評価してもいいのではないかと思う。少なくともやさしい人間の方が男意識をむき出しにした男よりもましである。

人間が本当にやさしくなるということは、ヒエラルキー意識から自由になることである。こうした意識がなくなれば、身分にふさわしく振るまおうなんて思わなくなる。女のために何かをすることもいとわない。何かを自分にしてくれる人がたまたま女であっても別に気にならなくなる。

男が育児教室に通うことも、仲間で作りに励むことも、こうした男らしき文化の文脈の中で抱えなければ意味がない。「カミさんが病気になった時困るから」というのでは何も変わらない。「女が男にサービスするのはあたりまえ」という男文化の体系に疑問をさしはさむことこそ、育児教室や料理作りの意味があると思うのである。

だが、道は決して平坦ではない。男らしき文化を支えているのは男ばかりではなく女もいるからである。この国の多くの女たちは男たちのヒエラルキー意識に側面から援護射撃をしている。その流れ弾が他人に振りかかることになってもおかまいなし。そして自分に振りかかって来た時は「どうせ」「しよせん」の女らしきで耐えてしまうのだ。

こうして男らしき、女らしきの神話は少しも崩れず再生産されていく。それではいったいどうしたらいいのだろうか。そのひとつは男たちを男らしきの神話の世界に追いやらないことだ。カミさんたちは亭主を「全日制会社員」ではなく、ひとりの人間としての存在を要求することである。

そして最も重要なのはなんといっても教育である。教育は時間がかかるようである。結局は一番の近道である。子供を持っている女の人は男の子の持つ多様な面を男らしきとといったものだけに押し込めないでほしい。そして女の子には「女は女らしく」「女はだめなもの」といった先入観を与えないでほしい。女がひとりの人間として自立してこそ、自立した人間を育てることが出来るのである。

ひとりでも多くの人間が、男らしき、あるいは女らしきといった閉ざされたものをふっ切り、ひとりの人間として自分の言葉で自分を語り、心を打ち開いて異質の人間に接することが出来るようになれば、ぼくたちの社会はもう少し生き生きと、楽しいものになるに違いないと、私は思っている。

(共同通信文化記者)

特集対談

「男らしさ」の 日本的構造



ジョン・ネースン

日本文学専攻
プリンストン大学教授。

青木 やよひ

評論家
毎日新聞日本研究賞受賞。



大和魂、実は女々しさ？

青木 男と女とは身体構造が違うから、男らしさ女らしさというものはあるのが当然、と思われていますね。ところがその正体は本当はとてつと捉えにくいものではないでしょうか。

女が人間らしく生きるためには、その正体を見定めて行かないと、思わぬところで足をすくわれることがずいぶんあるんですね。

ボーヴォワールじゃないけど、女は女に生まれるんじゃない、女に作られる、ということ、これは男の場合でも同じだと思います。男らしさ、女らしさということは、社会環境、家族などをひっくりかえした文化の問題になるんじゃないか。

日本人同士で男らしさを論じるよりも、文化の違う方と一緒に、文化的落差を鏡にしてこの問題を映しだしてみたら、男らしさというものがよりよく分るんじゃないか、ということとは前から考えていたんです。

ネーソン 例えばアメリカのウーマンリブの連中に、男らしさとは何か、と言ったら、そんなものはありつこない、男も女も同じだという答えが返ってくるにきまっているんですが、そういう考えではこの対談は成立しませんね。

青木さんが仰言るように、たしかに男らしさというものは社会によって、あるいは社会的期待によって作られる部分があるわけだけれど、ぼくはやはり、男と女は違うと思うんですね。ともかくこのことを前提にしないと……。

これはウーマンリブの人たちから見れば非常に反動的な話になるわけですが……(笑)

まず、男らしさを論ずる場合、日本には源氏物語というものがありますね。この中に光源氏というのがいわば理想的男性として登場している。彼はすぐれた男、つまり男らしい男であるわけでしょうか？ ところが西欧的感覚で見ただけ、非常に女々しいところがある。花を見て泣いたり、顔もこう、オタフクで……(笑) 女の区別が中々つかないんです。西欧人がこれを見るとびっくりする、これが十一世紀の日本の理想的男性か、と……(笑)。

それから五百年ばかり、乱暴な話ですが一気にとばして、江戸時代になりますと、遊廓で遊び狂っている男のタイプ、粹な男、いなせな男というタイプがあるわけです。これが日本の古典的伝統としてずっと存在している。これらは、西欧的感覚ではなかなか理解できない男らしさなんです。

青木 源氏を女々しいと仰言っただけれど、たしかに日本には、そういう伝統があるんですね。

大和魂というものも、戦争中はおもった、潔く散る桜花のイメージに結びついた、「勇敢さ」として教えられていたけれど、本居宣長なんか読むと本当はそうじゃない。みやびだとか、ものあわれだとか、非常に美的なもので、要するに女々しいんです。彼は、当世の儒学者は人間は強いものだと言っているけれど、そうじゃない、やさしいもの、美しいものに打たれるのが人間だと言っています。つまり宣長は大和魂をやさしさだとか、美しさとして扱っている。

そういうものが文化の中にずーっとあって、これが本来の日本の基盤を成す伝統だったのではないか。としたら、どこでこれが今のようにならしたかにすり変ってしまったのかしら。

ネーソン すり変ったのではなくて、微妙に残っているのではないのでしょうか。

例えば三島由紀夫の中にも、ますらおぶりとたおやめぶりとが一つになって、本当に立派な男ができるという思想がありますね。つまり西欧的思考の中では女々しいとされているところが加わって、本当の男らしさが作られるという……ひよわい、変りやすい、傷けられやすいところが、日本の男の中にはあるんじゃないか。

古典の中にもそれははっきり現れています。現代の芸能界を見てもね、テレビなんかに出て高校生あたりに人気のある坊やたち、ぼ

くらが見たら、十二・三才の女の子にしか見えない。男を感じさせるものがみじんもないんです。沢田君はじめチューリップだなんてね、日本ならではのいい男です。

編集部

欧米ではそういうタイプの男に魅力を感じずることは皆無なんでしょうか。

ネースン いや、あります。ありますが、しかし、いわゆるいい男とされている男の中に、少しでも女々しいものがすけてみえた場合、あいつは何だ、ということになる。軽蔑される。例えば欧米文学の中に、光源氏のような女らしさを持つヒーローは存在していません。

それから男の涙なんていうものもありませんね。座頭市が——これはすばらしい男ですがね——ワルに向ってね、お前さんも今に涙を流すようになるんだぞ、なんて言う。流して始めて一人前の人間になる、っていうようなことをね。これには少なくとも、アメリカの人間は驚きませんね。こんな考えは理解できません。

青木 欧米での男らしさというものは、やはり攻撃性と結びついているんじゃないかしら。

あの攻撃性は性のタブー視からきているんじゃないか、と思うんですよ。ミシェル・フーコーも言うように、日本には肉体や性を罪とするキリスト教的なタブーがなかったため男らしさの觀念も攻撃的ではないかと思うんです。



ネースン しかし明治以来性に対するタブーは出てきていますね。

青木 ええ江戸時代すでに出ています。しかしそれは武家のモラルなんで庶民とは全然違うんですね。そのモラルが明治になって庶民のところまで下りてきて、戦後それがずーっと続いている。

日本では一方に、二千年来の女々しさの文化の伝統があり、他方に武家文化——儒教のストイシズムからきた抑圧の文化——男の文化があると思うんですね。

やつちやう男・やらない女

青木 ところで、いま勝新太郎の映画をとって

いらつしやるということは、彼の男らしさに魅力を感じていらつしやるということじゃないんですか。

ネースン もちろんです。

ぼくが彼の中に見ているのは、男としての自己主張の強さなんです。自分を相手に絶対に合わせないで、何でもモレーツにやつちやう。

これは一方では自惚屋ということでもあるんだけれど、一つの男らしさでもある。ぼくが勝新に惹かれるのは、ひそかにね、ああいふ風になりたい、ああいふ風にふんぞり返っていたいという願望があるんだ。あの人の野性動物的自己主張のすさまじさにはかなわないア。その半面、彼の中には一種独特のやさしさも存在しているんだけれど。

青木 いわゆる日本の男は勝新の男らしさを持つていない、だから魅力を感じるということですか？

ネースン いわゆる伝統的な男らしさ、例えば男の約束は絶対破らないとか、気がぶがよくて金ばなれがきれいとか——これが嵩じると、宵ごしの銭は持たないという、江戸のイナセに通じる部分、勝新の中にはそれもあります。しかしやはり一番男らしい点は、彼が主張すべき自我を持っている、ということですね。

青木 女にだって主張すべき自我はありますよ。

ネースン いや彼の場合、主張すべき自我といつても、それはあるいは本当の意味で主張すべきものではないかもしれない。善悪という意味でいえばね。しかしともかく、やつちやうんですね、彼は。

青木 ある種の内発的エネルギーにつき動かされてやっってしまう、ということですね。しかし、本来的にはそれは男だけのものではありませんよ。ネースン もちろんそうじゃないです。

青木 男らしさの対極として女らしさというものがあられるわけですけど、いわゆる女らしさというものと、私の考えている女性^{オウエイ}というものを本当に生き切った女というものは違うように思うんです。私がそういう意味ですごく惹かれる女に、王女メデアとか、トリスタンとイゾルデのイゾルデだとか、ジャンヌ・ダルクだとか——共通しているのは、自分の内なるエネルギーに押し出されてどうしようもなく何かをやっってしまうということ。

ネースン 勝新と同じことですね。

青木 同じなんです。しかし彼女たちが何故女らしいのかと考えてみると、その行動力の裏づけになっているものが、すごい直感力とか、感受性とか、イマジネーションの強さといったふうに、私たちの一直線の行動とは一寸、色合いが違う。行動に行く間に微妙に揺れ動く感性み

たいなものがあるんですけど、それはいわゆる女らしさとか、弱々しさとかいうものとは違う。してみると世間が期待している男らしさ、女らしさというものと、ネースンさんや私の考える男らしさ女らしさは、実は非常に違ったものではないのかしら。

ネースン これはむつかしい問題ですね。例えばブルーストね、ぼくは彼の作品は、文学としては最高のものだと思ってるんですが、この人は女よりも感受性がつよい。ホモセクシユアルでもありましたし。しかし彼の中に男らしさがなかったかという点、ぼくはやはりあつたと思う。いわゆる男らしさとは違った、もつと人間としての凄味みたいなものね。しかし彼の作品を女が書いたと言っても少しも変ではないで



しょう。

青木 私はね、男でも芸術家としてすぐれた人は、精神の中にすごい女性^{オウエイ}を持っているという感じがしてならないんです。ゲイなんかもそうですけれど。

ネースン しかし一般的に言って、男らしさというものは、女らしさに対してあるものでしょう。つまり女は男のごとをやっちはいけない。それに対して男はやつちやう。やつちやうのが男の文化。いわゆる男らしさ礼賛は反動的な話なんですよ。

人間がすばらしい行動をおこすということなら、本当は男も女もない。しかし男からみて、女らしい女ということは、オレたちが必要としていることにすぐ応えてくれるのが女らしさじゃないか、と思うわけ。ということとは、女は自分自身のことばやつちやいけないということが根本にあるということです。

青木 男の価値体系で出来上っている社会ではそうなりますね。女らしさがコケットリーの同義語に近くなる。しかしこれは、「期待される女像」にすぎず、女の本質じゃあない。しかもそういう社会では、男もまた「期待される男像」によって束縛されているんです。

ネースン だからもちろんこの場合は、男らしさも女らしさも作られたものなんです。

女傑という言葉があるでしょう。これは女に
対する男の非難の言葉なんです。あの女はやり
たいことをやっちゃう女だ、女らしくない、と
いう考えが、根強く毒として社会の中に残って
いるわけです。



『らしさ』が全人格を左右する

「らしさ」という言葉ですが、日本ではお前は
男らしくないぞ、と言われるのは非常に侮辱的
なことなんです。アメリカにもそういう言いか
たはありますか
ネースン これはね、言わないです。表現がな
いんです。

青木 女に対する蔑みの言葉として、女らしく
ないっていうのは？

ネースン ウーン……やはりないですね。

青木 それ！これは重大なことだわ。すごい
謎がとけたと思います。

アメリカにだって、女の側からみて男らしい
男に惹かれ、男の側からは女らしい女に惹かれ
るという事実はあると思うの。にも拘らず言葉
がないということは、重大な鍵だと思うんです。

男らしさ女らしさというのは、いわば人間の
個性みたいなものですよね。ところが日本では、
それが個性という特殊性に止まり得ないで美学
になっちゃう。ということは美が普遍化し、規
範性を持ってきて、モラルに転化してしまうと
いうことだと思ふの。その段階で、その規範に
適さない人間はダメだということで、人格の全
否定になる。そこが日本の特殊性じゃないんで
すか。男らしくないということは、お前はダメ
な人間だということの最大級の表現なんですよ。
女の場合もそうなんです。道に外れた人間だ、
といわれることなんです。

ネースン どういう場合にそう言われるんです
か。

編集部 女のくせに自分の好きなことをやっ
ちゃう、という場合でしょうね。

青木 日本の場合、女性に関する法的な制度は、

憲法にしろ民法にしろ、先進国の中で特べつに
遅れているわけじゃない。しかし、女が自由
に生きることに対して抑圧が非常に強いんです
ね。日本には欧米に比べてはるかにつよく、女らし
くないと思われることへのタブーがあるんです
よ。つまりそれは人間としてのモラルの問題、
人間失格の問題になってくるわけ。

私たちが人間として解放されたいと願いな
が、もう一つ踏み切れないでモヤモヤしたもの
を抱えこんでいるのは、そういう風に美意識か
らくる道徳的なしめつけが意識の中にあるんだ
と思うんです。そのへんを変えていかないと、
いくら制度だけ変えてもだめなんですな。

ネースン ぼくはね、日本の女には、ものすこ
い脆さを感じるな。ぼくが自分の持っている力
をもろにぶつけたら、こわれてしまいそうな、
脆さを……。

ぼくという人間はやはり、強烈な力を持つて
いる人間なんです。日本にいるときは、なるべ
く見せませんけどね。ともかく、力を持つてい
る。

アメリカの女に、その力をそのままぶつける
とするでしょう、そうすると、それと同じだけ
の強さのものが、向うから返ってくる。また女
のほうでもそれを期待しているところがあるん
ですな。

ところが日本の女の場合、とても自分の力をそのままなかぶつけられない。もう、すごくその点で自分を抑えてしまってますね。そんなことをしたら相手がたちまち壊れてしまいそうな感じですよ。

その脆さが又、日本の女の魅力でもあるんですが。

編集部 それはまだまだ日本の女が主体的に生きていないからじゃないんですか。

ネースン そうなんでしょうか？

編集部 でも奥さまは日本人でいらっしやるんでしょう？

ネースン しかしあの人は特別だから。

ともかく強烈な人で、やっちゃう人なんです。だから日本にいるあいだは、彼女は絶えず芝居をしていると思いますね。彼女の本当の姿は、日本にいる時は分らない。やはり、ニューヨークなんかにはいる時が、本当に呼吸のつける人間なんじゃないんですか。

しかしぼくなんかと違って彼女は非常に謙虚な人間でもある。まあUFOから下りてきた人ですね。

女性差別 Ⅱ 男らしさ

という思いこみ

編集部 日本の男は家事をする事が男らしさを

損うと考えている面がありますでしょう。アメリカではそういうことと男らしさとは全く結びつかないわけですか？

ネースン いや、それはあります。ぼくらはそのへんは卒業しているけれど……。

ぼくらはともかくエリートなんです。ハーヴァード出身で、東部の知識人、どうしようもない優等生です、これは。(笑)だから男でも家事をやらなきゃならない、という考えが一般的になつていて。ところがアメリカのふつうの中産階級あるいは労働者階級の家庭に行つてごらんさい。そんなこと滅相もない話ですよ。ふつうの男なら帰宅したらビール出してもらつて、椅子に引っくり返つていて。ところがこれが日本だと、インテリであればあるほど、逆にアメリカの労働者階級の構えになつちやうんですか

青木 武家的儒教精神が貫徹しているんですよ。私の小さいころ、赤ちゃんをオンブして歩いてる男の人なんかいくらありましたよ。でもこんなことインテリは絶対、やりませぬね。

ネースン ぼくの活動屋のスタッフがうちへくるでしょう。ぼくが彼らの前でいつも同じ紳経でふるまうと女房がすごく気を使う。例えば彼女が皿を片づけに立つとぼくも立つでしょう。そうすると彼女が全く柄にもなく、いいよつて

とめるもんだから、最初は全く面くらつちやつて。しかしぼくがそれをやるとまわりの男たちが閉口しちゃつて大変なんですよ。

青木 その場合、亭主にあんなことやらしている女房がわるいつていうことになつて、非難は奥さんの方に向けられますものね。さっきの間失格者になるんです。

ネースン そう、そうなんです。

もちろんぼくよりは女房のほうに家事の負担はかかつているんだけど、たまにぼくの番がやつてきて、今日はこどもが六時に帰つてくるから、五時半には仕事を切りあげちゃおう、なんてぼくが言うとなつと、もう「ハ？ 何スカ？」とまるつきり意味が伝わらない。だからもう、「今日は五時半で中止！」と言うようにしています。もう全く、伝達の手段がない。

しかもそれがまた、今つきあつてるような、横文字の読めないような活動屋より、東大の教授なんていうインテリでエリートであればあるほど、その度合がひどいんです。

青木 日本では公私の別というのがあつて、公が絶対に優先するんです。家庭というのは私事だから顧みてはならない、というモラルがあるんですね。だから社会的地位が高いほど、家事に気を使うのは男らしくないということになる。

ネースン だから亭主関白というのが男らしさ

の一要素になるんじゃないんですか。

編集部 アメリカではエリートほど家事を分担

するというのはどういうわけですか？

ネースン それは女性解放運動からきているんです。

編集部 意識面の変革からきている、というわけですね。しかし奥さまが専業主婦だったらどうでしょうか。

ネースン やらないでしょうね。ぼくの女房は強烈な奴だから、ぼくをして手伝わしめているわけ。ぼくもふつうの女と結婚していたら、帰ってきたらスリッパを出してもらって、パイプを出してもらって、コーヒー持ってこい、ってやつてるんじゃないですか。(笑)

青木 不思議に思うんですけど、七年ほど前私がアメリカへ行った時は、会う人ごとに自分は *bigot* (人種差別主義者) じゃないと言っている。面喰らったものなんです。今日のパーティには黒人を何人よんでる、とかね。それが、現在のアメリカ人は、自分は *sexist* (女性差別論者) ではないと会う人ごとに言うらしいのね。人種差別の時と同じで、それを言うことで、自分の教養のほどを相手に知ってもらって、っていう感じなんでしょうね。

ネースン そう、全くその通りですね。

青木 そこへ行くと日本には女性差別が相変ら

ず実に強固に存在している。日本というのは元来他人指向型の社会で、人の目を気にする人間が多いのに、この問題については女性差別を公然と表現して平気なんです。明治百年のモラルの植えつけがよほど強烈だったということ、もう一つこれは、日本の急激な近代化のひずみの現われだと私は思っているんですが。

編集部 日本には人間尊重の本当に基本的な考えがなかったんじゃないでしょうか。欧米のヒューマニズムの底には何と云ってもキリスト教がありますから。

青木 日本と西欧のどつちがいいという問題でなく、日本には日本なりのコミュニケーションのモラルがあつたわけでしょう。そこに明治以来、他のものがつき木されて、もとのものが深層構造として残ったんです。それが時にはプラスに時にはマイナスに人間関係を支えている。

だから女たちは、近代的制度としても差別されているし、もうひとつの深層構造がマイナスに働いて、近代的差別がそれによって増幅されている。文化は千年単位でしか変らない、とすればこれは容易には変らないでしょうね。

そうとすればこの現実から出発しなければならぬわけで、欧米型解放をめざすだけではことは解決しないんです。男らしさ一つとつてみても、日本的あり方の根を探ってみることが大切

だと思ふの。そして、伝統文化を逆にプラスに変えてゆくことですね。

ネースン ともかく長年の封建制の中で培われてきた日本の男の男尊女卑、この根強さには全くおどろきますね。

ぼくだって心ひそかにやさしい女性が好きなんです。いわゆる女らしい女性が。そのぼくにしてさえ、日本の男性には驚いてしまう。

青木 具体的にはどんな場合ですか？

ネースン いやね、女なんかは教えてもものにならないだろうとか、伸びないだろうとかさ。そう言ってる人間がね、日本一の作家だったり、大学教授だったりするんだからな。不思議でならない。

そりやぼくだって、自分の女房に皿洗つてもらいたいですよ、おそろくひそかに、そう思ってますよ。だけど、だからといって、女は伸びないとか、女がぼくより頭がいい事はありません。いなんて、そんなことは考えてない。それは言い切れます。やっぱ、僕は日本人とは違いますが。ぼくはそこまで馬鹿になつていないですよ。**編集部** そういう態度が男らしさの要素の一つだと思つている日本人がまだまだ多いんです。(まとめ・田中)

さがしてま

共同保育をして下さる方

週三回、各半日ぐらいつつ、
 こともを預かりあつて自分の時
 間を持ちませんか？ 当方二歳
 の女兒あり。保母資格を持って
 います。できるだけ交通の便が
 よい方を希望します。

始めるに当つては、相互によ
 く話し合い、慎重に行ないたい
 と思います。 前田淳子
 市川市市川南5-5-3
 〇四七三-二四一七二六七

名簿がやっとできました！

本当にお待たせしました。こ
 の名簿がきつかけになって、皆
 さんの交流が拡がることを期待
 しています。

一部二百円ですので、切手あ
 るいは振替でご入金下さい。わ
 いふの会計にとって、名簿印刷
 費の重みは身にしみますので、
 どうぞよろしくお願い致しま
 す

編集部
 振替東京五一一〇四三〇です。

声をかけて下さい

乳児期、幼児期のこどもを持
 ち、核家族でくらしついでいらつし
 ゃる年代のお母さんへ。この年
 代の女たちが、どんな日常を送
 っているか、わいふ独自の見地
 から調査分析を企画しています。

協力の内容がご自分の生活の
 大体の記録だけです。二週間続
 けていたただきたいので、お気持
 のある方は編集部に声をかけて
 下さい。 編集部

おもとの葉の効用

こどもの頃、家へよくきた花
 屋のおばさんが、トゲか何かで
 指先のひょうそで悩んでいると
 き、母がおもとの葉で治すこと
 を教えてあげたら、きれいに治
 り、大変感謝されたとのこと。
 私も針仕事などで実験すみな
 ので、これは自信をもって言え
 る。

●おもとの葉をきれいに洗い、

次の本をお送りできます

地方にいらしてよい本が手に
 入りにくい方、本屋へいらつし
 ゃるヒマのないかた、わいふ編
 集部で次の本をお送りできま
 すので、ぜひ声をかけて下さい。
 ただし部数に限りがありますの
 でお早目にどうぞ。

- おんなの戦後史 296頁1200円
- もうさわようこ著(未来社) 1000円
- こどもからの自立 232頁1000円

伊藤雅子著(未来社)

●おんなの現在 238頁1200円

伊藤雅子著(未来社)

●親の出る幕 218頁600円

樋口恵子著(ポプラ社)

女たちの写真展

のびやかな女たち

自立した女、自由な人間とは
 何かと問い続け、強く、のびや
 かな女の姿をとりつづけた、松
 本路子さんの写真展が開かれて
 います。入場無料です。

●六月二日〜七日 10AM〜30PM
 西武新宿ビルベ8F

(〇三一二〇八七〇一)

●パート1 日本の新しい女性
 運動とその周辺の記録

●パート2 ヨーコ・オノ 小

沢遼子、浅川マキ等の女たち

●パート3 海外の女達の記録

約百点の作品が展示されていま
 す。楽しみな写真展です。

同名の写真集が六月一日、話の
 特集社から発行の予定です。



新宿区 上沼博子



連載第二回

相州八菅山

足立原美枝子

六

姑の父も祖父も学者であり歌人で、風雅の道に長けた人たちであつたから、そのまな娘の姑がいかに教養を積んでおつたかは、理の当然であらうが、姑はついに一本の花もいけてはくれなかつたし、茶の湯の話も、琴の話もしてはくれなかつた。

私の知る姑は、ただ働けの日々であつた。しかし、二人の義姉からきけば、

「若いころはもつと大変だつた」と言う。

「今は大分おとなしくなつて、仕事もおおようになつてきた」と……。

そして働きながら、時に応じ座右の銘ともおぼしき格言が、いくつもすらすらと口をついて出てくる。私は驚いた。

私がお座なりに勉強したのと違い、すっかり自分のものにな

つて、身体の中から自然の言葉となつて出てくる。私は敬服した。

「東京から来て間もなくのこと。」

姑は私に、はつきりと宣言した。

「お前は今まで息子の給料で暮らしていたので息子を第一にと仕えただろうが、うちでは男の収入で暮らしているのではない。だから何ごとも平等だよ。たとえばお茶づけご飯でも、おじいさんや息子にも同じに分けて、何も女だけが冷たいのを食べることはない。お風呂だって都合によっては誰が先に入つてもいいんだよ」と。

これがもし、姑が何十年かのあいだ「忍」の一字に堪えた嫁であつて、それから得た純粹な平等主義であつたのなら、それこそ、一大先覚者であつたかも知れない。たしかに姑は当時の女性としては、よく考える人であつた。

がしかし、姑は足立原家の家付娘であり、ぼたもちの菜（ぼたもちに副食はいらぬ、つまり、どうでもいい娘）とまで言われた九人姉のしかも後添いの末娘であつたが、いろいろの経緯の末、四十何代目かの家督を受けついでいるのである。

一家を守り、産をふやすことが彼女に課せられた責務と固く信じ、その大綱に悖るものがあれば、それがたとえ夫であつても決して容赦しない……。

残念ながら姑の平等は、純粹な民主主義とは大分と異質のものであつた。

姑はまた、「私は家つき娘だから文句も多い。しかし、姑に勝つてほめられる嫁はないから、無理と思つても決して逆わらないこと」と。

私はどんなことがあつてもこの人に従わなければならぬであらうと思つた。馬鹿に徹すること、これが新参者の嫁の悲愴な決意であつた。

姑は、よく手の入つた木綿の黒っぽい着物に、巾広の毛織りの前かけをかけて、帯は狭い博多をきつちりとしめていた。

笑えば眼は細まり、泣く子も黙るほどの愛嬌さであるが、一度怒つた時は、眉毛はかぎになり、額にしわを寄せ、嫁などは縮みあがり、舅も黙りこくり家の中はしんとして静まり返つてしまふ。私には舅より姑のほうが偉大な人物に思われた。

七

舅は、中津川をへだてた向う側の台地、中津村熊坂に代々名主や代官をしていた作り酒屋の旧家から婿養子になつてきた人で、姑といつしよになる前に平塚の回漕問屋へ養子に入つたが、学者肌のためこの家の生活に合はず離縁となつて出もどつていゝうち姑との話が成立したと言ふことであつた。

「神職はいたしません」という条件であつたそうで、神官の永朝にしてみれば、必ずしも気に入つた婿とは言えなかつたらしい。

神職も永朝でやめてしまい、舅は役場へ入り、助役から村長へ、郡会議員にもなつて長年名譽職を歴任した。

奥まつた離れへ入つたとき、ひねもす読書三昧で、女中たちさえもめつたに見たこともないというほどの、「本くい虫」とあだ名されたお坊ちゃん青年が、この姑と一緒になつたのである。

ずい分といろんなことがあつたらうと思ふ。

ある時、庭の草むしりを一緒にしていた姑は私に話してくれた。

「結婚して三つ目（三日ほどで新夫婦が里へあいさつに行く風習）に、酒屋（舅の生家）の表座敷であいさつしていると、弟さんが外から台所へ入ってきた。そのまま黙って広い敷台へ腰かけている。と見ると女中さんが小さなタライを勝手の方から持ってきて、中には水か湯が入っていて、はきものを脱がせその中へ弟さんの足を入れ洗ってやっている。」

きれいに拭いてもらってから、大の舅の弟さんはズッシズツシと座敷へきて、お新客にあいさつをした。

家へ帰ってから私は言っちゃったよ。『うちでは絶対に足など洗ってやりませんからね。あんな真似がしたければ、今日離婚しましょう』と」

舅はおそらく、「自分で洗いましょう」と言っただけに違いない。私は老いたチチとハハをその時代に置きかえて、あれこれ想像して心算しかつた。

昔は現在とちがって村長は「村長様」と村人たちに親しく呼ばれて、村長も村のためなら私財を投ずることもいとわず、そのかわり役場の小使室で、小さないろりを囲み、やかんでわかした酒をひねたくあんを肴に、チビリチビリやって、ほろ酔い気嫌で帰っても誰一人悪口を言う者もなかった。

ハハはこんなことも話した。

「村長は損の親玉で、役場からのお手当など見たこともないし、持ち出してばかりだったよ。お酒が呑めるのが何よりの楽しみだったらしいが、ある時は、せつかく仕上ったばかりの夏羽織を着ていって、帰りは深酒で、カギさきだらけ、何やらべ



舅 昭和12年頃 72歳

たべたで、あんまり口惜しいから翌日丸めて穴へ埋めてしまっ
た」

「またある時は、はいていた下駄を書類と間違え、床の間へおき、ふとんにもぐりこんで『おしげ、おゆき、水持ってこい』とどなっている。酒屋の家へ帰っているつもりだったらしい」と。

チチの実家のほうが平地で役場からは近いし、どうせ園（しん）の高い家に帰って妻におこと頂戴しなければならぬなら、いっそ実家へ行ってしまいたいと、酔ったチチの本心が行動とは別に、チチの心を捉えていたに違いない。

また近所の人が崖道を下ってくると、石崖の下から、「カラ
ンカランドスン、カランカランドスン」と音がしている。何だ
ろうと不審に思つてのぞくと、村長さんが空の弁当箱の包みを

手首にかけて這い上ろうとしては落ちていたという。

「のんべえさんだから幾人の人にご厄介になっているか分らないし、誰れでもこちらから頭を下げなければいけませんよ、と私はおじいさんにそう言っているんだよ」と。

私たちの針仕事のそばで、鉄色無地の紬の綿のいっばい入った羽織の背を丸くして、知らん顔で新聞を見ている白い口ひげの剪を見やりながら、私は訳もなくおかしかった。

私は到底、ハハには頭が上らなかつた。私は姑をえらい人だと思つていたし、頭のよい人だと思つていた。しかし、義姉たちは、「おふくろはそうでもないが、父親は頭がいい人だつた」と言われる。ハハよりチチの方が頭の良い人だつたとは、一体その父はどこへ行つてしまつたらう。私の目には、どうしてもそんな偉大なチチとは映らなかつた。

しかし長年、主人が村長になつた時つくづく述懐していた。

「歴代村長の遺した記録をみると、親父のものが一番秀でている。親父は大した人物だつたんだなあ」と。

大正も初年の頃、剪は厚木銀行の頭取をしたことがあつた。

しかし、忽ち倒産し、足立原家は大損害を蒙つた。当時の株券は父母の没後、チチの文庫から、まだ帯封されたまま出てきた。

明治末期発行の五十万円という額面である。

その後、県会議員への誘いがしきりとあつて、チチもその氣になつたらしいが、

「家の財産をあてにしないで出られるものならやりなさい、と言つてやつたら泥棒猫どもが誘いにこなくなつた」

と言つてハハは笑つていた。

私が剪と暮したのは、チチが七十才をこしてからのことだか

ら、果して私の見方が当を得ているかは疑問であるが、チチは学者として生くべきではなかつたであろうか。

一から十まで、身のまわりの面倒を見てくれる優しい妻にかずかれて、本くい虫の信條を貫く生きかたをしたらどうであつたらうか。

剪の桐の本箱には、フランス革命の原書や法律経済その他の分厚い本が、古い年代の匂いをこめてきつちりと並んでいる。

チチは自分の人生の方向づけを間違えたのではなからうかと、私には思われる。

姑はまた、

「喧嘩して一週間ばかりおじいさんと口をきかないで過した方が、相手は平氣。しかし、何としても不便で仕方がない、どう私が負けてしまつた」と話した。

今の剪を見ていると、さもありません、と合点出来る。

剪は寡黙な人で、黙つていふことに何の無理もない様子だつた。姑がせつつかなければ一日新聞を読み、何かの本を見ていた。

朝飯を食べながら姑は言う。

「おじいさん、鶏にくれたら、お葉（菜）の種をまいて下さいよ。動かないと毒ですからね」

チチは二三服、きせるでキサミを吸いおもむろに立つ。

鶏の餌くれはチチの役である。

台所の隅にある、今は使つていない古い風呂場の壁から、コール天のズボンを取り、古い縞のネルのYシャツに着かえ、その上に、これも明治時代の三つ揃であらうチョッキを着用し、

手拭を正確に四つ折にして禿頭に巻きつける。

ゆっくりゆっくりこの動作を進め、小型のブリキのバケツを下げて、積んである小麦の俵へサシ（竹を斜めにそいだもの）を入れ、三、四合ばかりを計りこみ、静々とガラス戸を開けて裏庭へ出て行く。

その水草を眺めていると、全くいやいやながらに見える。

鶏小屋で餌箱へ小麦をざらりとあけ、井戸端へ行つて、ポンプでバケツに一杯、水を汲み、たたらたたらの臼を利用した水入れへ補水する。

その底には、鶏糞と泥がいっぱい溜つていて夏などボウフラがわく仕末。時々の清掃は姑に命じられて嫁である私の役である。

しかし、きれいになつても、ならなくても、チチは一向に気にしない。

菜の葉をまきに行くチチは、かますの口を開けて、バケツを入れ、ワラの交つた真白な硫安を八分目ほどすくい、それを片手に鍬と熊んがを肩にかついで行く。

浅くうねをつくり、雪のように真白い硫安をまく。その上へパラパラと種をまいて熊んがで土をかぶせる。

それがすむとおもむろに野良着を脱いで着物に着がえ、陽の当る縁に坐つて黙つて新聞を読みはじめ。

ある時、

「おじいさん、お茶です」

と慣れない嫁は畠へかけて行き、発芽したばかりの玉葱の苗床をぐしゃぐしゃに踏みにかけてしまった。この時は、おばあさんを通じてさんざんお叱言を頂戴した。チチは直接私には何

も言わない人であった。

仕事ぎらいなチチと、仕事なれない嫁を使うには姑も大骨折りであつたことだろう。

ある時、離れのガラスの内縁で私は繕いものをし、剪はそばで新聞を見ていたが、不意に、

「おばあさんは家付娘だから」

と私を振り返つてつぶやいた。

若い時は、さぞにらみの利いたであろう鋭い目だが、今はもう視力も鈍つて大分白濁しているが、まともに私を見、私に話しかけたのは、前後を通じて何回もない。

私はこの時、冷たいまでに寡黙のチチから、血のあたたかさを感じ、婿養子と嫁の共通する親和感をおぼえ、心なんだのであつた。

八

私ども親子四人が八菅の家へ住み始めて、まだ日も浅い頃であつた。

朝飯の膳を囲んでいると、体格のいい五十がらみの親父さんが台所のガラス戸を開けて入ってきた。木綿縞ながら羽織仕かけである。

いつもは紺木綿のシャツに紺の股引、それにはんでん着であるが、今日は改つたいでたちなのだそうだ。

姑は、「フトンを出しなさい」と私に言いつけながら、広い板ノ間に切つてある大きな囲炉裏いろりの定座につく。私が茶の間の隅にある小型の薄い縞の座ぶとんをとつてすすめながら黙つて頭を下げると、

「ご近所のYさんだよ、今度東京から入った息子の嫁です」
と姑の紹介に、再び

「よろしくお願い致します」とあいさつする。

食事をすませた父は、ゆつくりと茶の間の火鉢の前に坐つて、黙つて煙管をくわえ、主人は炉端の一角に坐つた。

「やあ、お久しぶりです。すっかり立派におんななすつて……」
それからXは東京のこと、村のことと、それからそれへと話題を移らせながら主人へ問いかける。

姑は目を細めてにこにこ相槌を打ちながら火箸をまめに動かし、お鈎かぎ様を操つて鉄びんを上へ上げ、煙らぬように薪を上手に燃している。私はそつと食事の後片づけをすませて姑の脇に坐り両手を膝に、きれいに燃える火の色を見ながら、姑から次の命令が下るまで、Xという人物の話をそれとなく聞いている。三月といつてもまだ寒い。いろりの火は暖く燃えているが、背中はその分、冷たい風が渦巻いて頸すじがぞーつと寒い。

「田舎の生活は大変ですぜ」

こんなことを誰にともなく言いながら、一時間ばかりしてXは帰つていった。

柔和な今までの姑の眼が、きりつとしたかと思うと、主人と私を見くらべながら言った。

「今日、Xさんが何しにきたか解るか。登（主人の名）の人物を調べにきたんだよ。お前たちはここへ住むからには色んな人と付合わなければならないか、たとえば今日のXさんは、頭の図抜けていい人だよ。だが能ある鷹は爪をかくすのたとえ、めつたに気を許すなよ」と。

その後Xさんとは色々のことがあった。がしかし、その度に

姑の言葉はいつも力強く主人や私の判断の基盤を作ってくれた。これは山の立木のごとでやってきたKさん。ガラガラと賑か
で、大声あげてよく話す。姑は、

「この人は腹も口も一つだよ。安心して付合いな」と言われた。

ある夜、門のくぐり戸をドンドンと叩く音。かけて行つて、「どなたですか」と聞けば、「Tだと言えば分る」と言う。姑に告げると、「開けてやりなさい」と笑う。

その人は一升びんを両脇に抱えて、大声あげて入ってきた。台所の上り櫃へ二本並べて、もうかなり出来ている口調で、「この倅とこれから仲好くやるんだ」と言う。姑と主人が端近に行つて、いろいろ取りなしていたが、始めは大声で、ペランメエ口調の彼も、そのうち尻尾を巻いた犬のように大人しくなつて、「まあ何分よろしく願います」と何度も頭を下げて帰つていった。

姑は、「あの男は、まあ敬して遠ざけた方がいい」と言われた。

以後、私たちはいつもその通り彼に對していたが、それが一番良い方法のようであつた。（つづく）

図号4頁の渡辺美代子さんの文中、「絞り麻の葉のお七草」は「お七帯」。42頁の「中国食品食べくらべ」中、桃のジャムびんづめ（長城印・25g）は45g、苺ジャムびんづめ（アオハタ苺ジャム110g 110円）は100gでした。訂正しお詫び致します。

冠婚葬祭

互助会を利用するには

冠婚葬祭——人生の一大事であるこれらの出来ごとの中、おめでたことは前々から準備もし、自分なりの考えで取組むことも出来ませんが、不幸な出来ごとに対しては、一向に準備のできていないのが、大半の人間の現状です。

最近、冠婚葬祭互助会の名をときどき耳にします。多くは葬儀のときに利用されているらしいのですが、本当によい組織なら、積極的にこういうものを利用することが考えられてもよいのではないのでしょうか。

しかし一方では、互助会をめぐるトラブルもかなり耳に入ってきますので、互助会の組織はどんなものなのか、安心して利用してもよいのか「わいふ家庭科」で取上げてみる事にしました。

互助会とはどんなものか

互助会というひびきから、何となく福祉団体のようなものを想像しがちですが、これはあくまでも営利団体で、サービスを売って利潤を得る組織です。

毎月一定の掛金を払いこんでおくと、結婚式あるいは葬儀のサービスを一家庭につき一回受ける権利ができ、その権利を何年でも保存でき——つまり何年か先になって、物価が相当上

がっても、お金を払いこんだ時点と同じサービスが受けられる、というものです。

高度成長に伴い、冠婚葬祭も年々派手になってきていること、しかし一方では、とめどない物価上昇に国民が悩まされていること、こういう土壌の上で、「誰でも、いつかは通らなければならぬ人生の儀式が、安く豪華にできる」という互助会のキャッチフレーズには、ひきつけられるものがあり、加入者は年々ふえて、昔からの葬儀屋の経営をおびやかすまでになっているようです。わいふ編集部での取材に際しても、一般の葬儀屋さんで「互助会」をよくいうところは一つとしてありませんでした。

現在互助会は、全国に三五七社もありますので、中にはインチキなものもあるということは十分考えられます。互助会を効果的に利用するために、どんな予備知識が必要なのでしょう。

何にどれだけかかるか

中国では両親の生きているうちから、お棺を用意するのが一般的だといわれ、最高のお棺を作って親を喜ばせるのが親孝行だといわれますが、日本では親のお棺どころか、自分のお棺のことを考えるさえ「エンキでもない」と言われそうです。そこでこの際、葬式にまつわる必要

物を、冷静に考えてみましょう。

まずお棺十覆いなどの附属品。最高級の松のお棺は五十万もかかります。

祭壇十飾付用具。三段と五段で、もちろん五段のほうがたかい。

告別式用焼香具。お香もピンからキリまで、十段階ぐらいあるとのこと。

幕。部屋や通路にはりめぐらすもの。

霊柩車。白木のが最上といわれています。火葬費。柏市のように自治体の火葬場がもつ

ばら利用される場所では千円単位ですみませんが、東京都はほとんどの火葬場を博善社が所有していて、特別最上から最上、と何段階もあり、控室や入口まで違います。

骨つば。それをのせる台。

こんなところが、葬儀に基本的に必要とされているもので、その他、仏式でしたらお坊さんの読経料、戒名などがかかります。写真引伸、通知状、生花、お清め塩、ドライアイスなども別料金です。

さて、一般の葬儀店にたのむと、費用はどれぐらいかかるのでしょうか。一体に葬儀店は互助会と違って、お棺がいくら、幕がいくらと明細をはっきりさせるところが少なく、全体を十〜八等級ぐらいにわけ、各ランクで値段をきめているところが多いようでした。

お寺の直営店で「公営なみの安値」をうたっている柏市のある葬儀店では、十五万位でやると思えばできなくはないが、ある程度立派にすれば五十万〜百万、またお寺には読経料十五万程度、戒名に十五万ほどかかるとのこと。

全日本葬祭組合の価格表によりますと、一号から八号まで、ランクがあり、最低の八号は十六万。五号で五十万、四号で七十万、三号百万、二号百三十万、一号二百万、特一号が三百五十万となっています。

新宿区内のある葬儀店では、価格は組合と同じで、最近では四号〜二号あたりの葬儀が多いとのことでした。

最近、住宅事情の悪い大都会では、病院で亡くなった人が直接、死体安置室で形ばかりの続経を受け、そのまま火葬場に直行、お骨だけがわが家に帰るというケースもままあるそうで、この場合はお棺と霊柩車、火葬費、骨つば代、その他の手数料を含めて約二十万であります。

以上は一般の葬儀店の場合ですが、最も安上がりにはドライにすまそうと思えば、自治体で葬儀を行うことができます。東京都なら区民葬というわけで、医師の死亡証明書を持って区役所で券をもらえば自治体が万事面倒をみてくれ、火葬場も公営のものを利用して、全部で十二万の公定価格ですが、他の雑費を入れても二十万

で十分とのこと。

また、葬儀店によっては、オリジナル葬という新しい形式の葬儀も引受けてくれます。宗教ぬきで、花などでお棺の周囲をかざり、音楽などを流して演出するもので、有名人のお葬式にときどき見かける方式です。これは互助会ではやってくる場所は少ないようです。

費用は七十万〜百万とわり合かかりますが、お寺や戒名にかかる分が不要ですので、ネットと考えると意外に安くつくかもしれません。

互助会ではいくらかかるか

さて互助会に入ると、一般の葬儀店にくらべて、どんな点が違うのでしょうか。

掛金は互助会によって違い、一つの互助会でも三通りぐらいあるのですが、一番多いのは毎月千円ずつ、五年間かけて六万円というものです。（加入時一括払いにするのと多少引きになります）また六万円全額払いこんでいなくても、何回か掛金を払ってあれば、施行の権利があります。ただしこの場合残りの掛金は一括払いにしなければなりません。

常識で考えても、六万円で一切の葬儀ができるというのは無理な話で、この六万円は全くの基本料金で最低限（三壇）の祭壇・柩・幕二張

使用料だけです。

結局、諸費用を整理してみると、まず基本料六万、祭壇追加料金及び種々かざりものに十五万、火葬料・霊柩車などに六万、乗りもン手配に五万、その他細々したものを二・三万、として、大体三十〜四十万円位かけるとかなり立派な式ができるそうです。

最近都内の互助会を利用して葬儀を出された方にお聞きしたところ、払いずみの六万円の方に三十八万一千円かかり、特に安いとも高いとも感じなかったが、特等の火葬にできたので満足しているとのことでした。またやはり都内の互助会を利用され、お寺も互助会のあつせんで頼まれた方は、葬式は市価の約半額ですみかなり格式のある曹洞宗のお寺で、おふせ三万戒名十五万、それにお車代五千円の二十万円たらずで初七日まで一切して頂けたので喜んでいゝる、と云われていました。

総合して考えてみると、断定はできませんけれども、互助会を利用すると一般葬儀店より、かなり割安にできるようです。

ただ互助会のうたい文句の「前もって払いこんだ料金いつでも施行できる」というのは誤解を招く恐れがあります。六万円程度の掛金は、割安に施行するための権利金、或いは予約金くらいに考えておいた方がよさそうです。

実際に互助会を利用して葬儀を出された方に向つてみますと、必ずしも「安かった」という印象が第一ではなかったようです。

といつても「高かった」というのではなく、まあ葬式を出すからには、故人のためにもあまり粗末にしたくはなく、ある程度の出費は覚悟しているが、一応納得のいく値段であった、という感じのようで、安いというより、ぼられなかった、という形容のほうが近い、といつたところでしょう。

話を聞いてみた方々が、期せずして「明細書をもりました」「明細書がとつてありますので」と、こちらが聞く前に「明細書」の存在を口にされたのが印象的でした。互助会では葬儀の進行について、祭壇を規格品にするかもつと上等のものにするかというようなことから始まり、値段表や写真入りのカタログを見ながら、細かい点まで喪主と打ち合わせて、葬儀の始まる前に明細書を作ってしまうようなので、喪主としてはいくら位かかるかの心づもりができて安心していられるという訳です。一般葬儀店では、事前の見積りをするにはしても、かなり大ざっぱなので、式がすんでから思いがけない請求がきてあわてたりすることもあるそうですが、最近互助会に刺戟されてか、事前にはつきりと打合せをするところも増えてきています。で

すから信頼のおける葬儀店に、日ごろから相談をかけておいて、細かい点までこちらの意向をしつかり伝えておけば、合理的な費用で気持ちよい葬儀を営むことも不可能ではないわけです。前後の考えもなく、「お父さまにふさわしい葬儀を」とか、「できるだけ立派にやって下さい」などと口走り、葬儀料に二百万もかかったなどというのはよくある話です。葬式貧乏などという言葉もありますが、頼むほうの心構えに問題のある場合もいふんあるのではないでしようか。

双方得する前払システム

なぜ互助会は、営利事業でありながら、このように安くできるのでしょうか。それは一口に言えば、もともとの資本金の他に、加入者の掛金として毎月どんどん入ってくる現金を、設備投資その他に運用できるためです。加入者が多いほど入ってくる現金も多く、また仕入れた設備をフルに利用できて効率がよいので、どの程度の加入者数かということが互助会を選ぶ一つのポイントといえるでしょう。

合理的なシステムではありますが互助会の利用にあたって、トラブルが全くないわけではありません。

一番多いのは何といつても、加入者が契約内容をよく理解してなかったことによるものです。「自分の葬式代で子供たちに負担がかからないように」と進んで互助会に加入なさったお年寄りのお葬式で、施行主である息子が、契約内容を詳しく知らず、「葬式代は払わずみ」とだけ簡単に信じている。それが払ってあるのは六万円だけと知ってビックリ「葬式代は親父が生前ちゃんと払ったはずだ。人の不幸につけこんで二重取りする気か」などどくっつかかる短気な人もたまにはいるとのこと。

移籍と解約についても、トラブルのおこることがあります。一たん加入した互助会を解約する時、払いこんだ掛金は全額は戻らず、満期まで払いこんであつても、九割弱(六万円の場合は五万三千元位)しか戻りません。

転居などのため別の互助会に入り直したいという場合には、できるだけ解約をせずに、転居地の互助会にそのまま移籍できるように、互助会同志で協力することになっています。

全日本冠婚葬祭互助協会では、原則として、利用者の希望にそつてどこからどこへでも移籍できることになっているので、何かトラブルがあれば連絡してほしいとのことでした。(注)

ここで、互助会を選ぶにあつたての主なポイントをあげてみましょう。

・通産省の認可を受けているか、全日本冠婚葬祭互助協会所属か——名前だけ互助会となつていても、全くふつうの葬儀店であることもあります。

・規模はどのくらいか、加入者数は？(東京の大手の互助会だと数十万人の加入者があると いわれる)

・セールスマンがこちらの疑問によく答え、誠意ある態度かどうか

・パンフレットに、前払金だけで利用できるサービス内容と、その他のサービス内容とがはっきり分けて書いてあるかどうか。あいまいだったり、誇大広告的なものはダメ。

これらの点に加えて、祭壇などがしつらえてある互助会のディスプレイセンターがありますので見に行つてみたり、実際に利用した人がわかれれば話を聞いてみたりすれば、かなりのことがわかると思います。

互助会に限らず日本の消費者はある意味でもっと疑い深くなる必要があるのではないでしょうか。特に主婦は、一円でも安いものをと日夜目の色を変えている割には、過保護体質というのか、まだまだ甘い所があるようです。互助会に対しても、「パンフレットの写真が豪華すぎてだまされやすい」「掛金だけではできないことをもつとはっきり書いてほしい」などの批判

が主婦から出されていますが、それらの意見は間違つてはいないのでしようが、多少の甘えがないとはいえません。

消費者の権利を確立するということは、単に要求を並べることではなく、いかにしてその要求を実現させるかです。消費者があまり過保護になつては、結局生産コストが高くなり、ツケが回つてきかねません。主婦は「甘えの構造」から脱し、消費者側からの積極的な調査や主婦同志の情報交換を通じて、移籍などの問題をはじめ、互助会事業の質の向上をこそ要求すべきでしょう。互助会に限らず、「業者はうまいことを言うのが仕事、消費者は疑つてかかるのが仕事」くらいのしたたかさが望まれます。

(取材協力・四方愛子)

(注) 全日本冠婚葬祭互助協会

千代田区若本町三一四一五

第一東ビル(八五一)三七〇六

この号から投稿規定を一部手直しして、詩、俳句、短歌などをご遠慮いただくこととなりました。スペースを大変とる上に、この種のもの、同人誌が沢山でておりますので、とくに「わいふ」で扱わなくともということになったわけです。あしからずご了承くださいませ。



手さぐりの自立②



お話をうかがったSさんは、大正末年の生まれ、青春をあの大戦争の時期にごし、病身のお母様を扶けて弟妹の面倒を見た上、お父様の寝たきりの老年を看護し、いつか婚期をも逸してしまつた方です。

現在では、七十歳過ぎのお母様と同居して、書道塾の先生をしておられます。

多少の財産があるので、彼女の働きだけに生活がかかつているわけではありませんが、独身でいらつしやるだけに精神的にも経済的にも、自立の志は固かつたようです。

勉強をはじめたのは四十八のときから……というSさんのお話は、主婦の手さぐりの自立にも、きつと役立つと思えます。

語る人 S・Wさん

(匿名希望)

中年からの手習い

—書道塾の先生—

泥坊見てナワをなう

主婦の自立

そうね、中年になって始める人、多いわよね。

みんな泥坊見てナワをなう式でね、子育てを終わってから、サア……となると、どうしても中年になつちやうものね。

私も中年から始めたけれども、独身ですからちよつと条件が違うわね。

この書道塾というのも、ずいぶんひどいものもありますよ。

べつに学校なんか行かなくても、ちよつと塾で勉強しているというと、近所の母さんが子供をみてくれませんか、といつてくる。じゃあ少し、と言つて数え始めると、芋づる式にあとからあとから来ちやうて、いつか塾になり上つちやうというのもあつて、程度の低い先生もいるわけ。

結局人間対人間の商売だから、先生の魅力でくるといふ面と、それに親からすれば、習いごとの中で習字というのは安いですからね、二千円前後というのが(一カ月四回)相場なので、手軽に子供を寄

越すんですね。

そういう最低の先生から、何段階も上には上がります。

いい先生は、一回が一万円くらいになる場合もありますね。それはお弟子さんもかなりの腕前になっていて、先生の前へ行って書くんじゃないで、家で書いて持って行く。添削だけです。それに準じて、一おう展覽会の審査員になっている先生、書家になっている先生の場合は、月三、四回で四、五千円から一万円位の月謝ですが、初級、中級から師範クラス等いろいろなと違つて来ます。

それより下のクラスは、もう書家ではなくて、書道塾で生きてる人、つまり妻子をそれで養っているような人で、一週間に二回も教え、一級何十人も入れて、塾の建物はぼろぼろ、汚い畳でネダをさわつてからでなくちゃ、坐るのもこわいようなところで教えて、ご自分のお住居はりっぱに新築なさつてる、そういう人もあります。

その人なりの、千差万別なやり方で、さまざま書道塾がはらんしている中で、学校、たとえば大学の書道部、二松書舎あたりを出たとか、書道専門学校を

出たという人は、まあましなクラスです。認定書をバンバン出す、塾の先生専門の養成所もあつて、そこで二年くらいやって、子供を教える人もたくさんあるんです。

書家になる学校

質はよいがお金がかかる

私が学んだ学校は、一おう芸術家をつくるための学校で、書家になるのが目的というところだから、認定書も出さず、書は死ぬまで書け！五年や六年で一人前になってタマルか、つて方針でした。塾をやつていけないとはいわなければど……。それは書家になれる人は、才能があつて、お金も必要だから、たとえば二クラスあつたつて、一人くらいしか書家にはなれませんか。

学費は、お月謝だけいえば高くはない。六年前私が入つたとき、半年三万円でした。入学金が五万円くらい。今では入学金十万、月謝もずいっと上つていて、ようが、でもこのくらいなら、たいていの家庭の奥さんが、何とかかとかひねり出せるお金ですよ。

ところが教材費というものがたいへんなの。法帖（お手本。中国古代の書家の作品）が一冊二、三千円、でも法帖はいつまでもお手本に使えるものだからいいけれど、紙、筆、墨、いずれも安物を使つていてはうまく書けないのね。

書くとき、ちやかちやか早く書いてしまつては腕は上がらないのです。

それで私は全羊毛のやわらかい筆、墨も上等のものを使いました。かな文字と違つて漢字を書く場合は、濃墨を一時間以上するんですよ。帖幅などのときは、更にうんとすりためて、やわらかい筆にふくませて書く。墨が濃いとじっくり筆にふくまつて、ゆっくりと字が書けるわけです。

この筆が、いいのになれば二、三万円、墨も濃墨、青墨といろいろあつて良いものはとてもお高いです。紙も、悪い紙使つていいのは最初の一、二年で、その後は手漉きのいい紙で書かないと叱られちゃう。

紙がまた、私たちのときでも一しめ二千枚五、六千円しましたから、今ではその二倍、三倍です。

文房四宝ぶんぼうしほうというくらい、こういうもの

はぜいを盡す習慣があるし、またそれ
なければいい字は書けないのね。

この他表装代、展覧会の出品料、とに
かく書家になるための勉強は、お金もか
かるし熾烈なものなのよ。

私は書家になどなれないけれども、あ
いう学校にいたおかげで、展覧会にも
学生として出せたでしょう。先生方は自
分たちの傘下によい書家をふやすために、
一生けんめいやつてるわけだからたいへ
ん協力して下さい。

まあ、そういう学校ですから、中年の
おぼさんはあまり歓迎されないわけです。
たとえば書家が自分の子供をまた書家
にしようと思つたら、六歳ぐらいからど
んどんやらせる。作品らしいものをこし
らえさせて、出品もさせる。そうやって
三十にもなれば、一ぱし力がついちやう
わけよね。

ところが中年になって始めると、いろ
はから勉強するでしょう。入学したころ
先生がわれわれ中年組にむかって言った
のは、「あなたたちはクセがついてる」と
いうことでした。

「いいえ、私は子供のとき、ちよつと
塾へ行ったくらいで、クセなどついてい

ないと思うんですが……」
と言つたら、

「字は書いてきたでしょう。ペンだろ
うが鉛筆だろが、書いてきたはずだ。
それがすでに、クセになつているので、
確固とした書体ができている。それを削
りとするのがたいへんだ」

若い人なら、砂地に水がしみ込むよう
に何でも素直に受けとるけれど、中年と
もなるとそうはいきません。

だから勉強するにはとにかく白紙の状
態でやれ、ということ、一ぱん、一流
のものをしよっぱなからやらされたんで
す。消化するかしらないかはお自由だ、と
固いものをいきなり与えられたのね。

古典、古い中国の書です。
こういう勉強をして、展覧会にも出品
をして、弟子もとる、という人は、書道
塾の先生としては質のいいほうなのね。

書道塾経営

あの手この手

ただ商売だけの先生は、子どもに飴玉
をやつて、休まず来たらごほうびあげる
とか、モノで釣る塾、多いんですよ。

私なんか子供を真剣に怒つちゃう。お
習字なんか、イヤだつて子には、ものご
とを貫きとおす態度の勉強です、いつて
やらせてしまうのよ。

子供によつてはそのきびしさが嬉しく
て、くる子もいるしね。

それから、塾経営には競書誌というも
のが関係があるのよ。

いろんな書道の、何々連盟とかいうよ
うな組織で、競書誌というのを出して
いて、そのお手本で習わせ、送つて級をも
らうんです。どこの書道塾でもこれを使
つて、級を取らせています。

私ははじめやらなかつたんですが、そ
れは競書誌の字はいわゆる型どおりの、
きれいな字なので、子供の字なんて野放
図なところ、個性があるのがいいのだけ
ら、型にはめることはないと思つたの。

ところが、子供たちがいうには、
「先生、お習字やつていっていうと、
何級？つて聞かれるよ。ぜんぜん級がな
いんじや、ハバが利かない」

というわけで、それに親も級が取らせ
たいのね。

そこで止むを得ず、営利的でない、た
いへんいい先生のやつていらつしやる競

書誌を使うようにしました。

何しろ、親が子供を書道塾へよこすのは、きれいな字を書くようになってもらいたいからなので……。

でも、無性格できれいな字を書く子がどんどん級が上って、個性のある、元氣溢れた字を書く子はいつまでも原級に止まる、というんじゃないかなんだけれど。

競書誌を使うということは、その組織の支部になることなんで、私は支部長というわけ。ところが、宮利主義の競書誌を使うと、先生とのおつきあいその他、やたらお金を取られるおそれがあるのでたいへんなのね。

私はその点、地味な先生の入っているのでもいいんですが……。

自宅がマンションでせまいから、借教室でやっているでしょう、借賃で半分持っていていけるくらいだから、はでなおつきあいなど、とてもできませんよ。

競書誌によつて、きちんと作品を出させれば、子供が十級から少しずつ登って一年一べんはお免状を下さる。だから、いいかげんな先生でも、競書誌使えばやっつけていけるというものはあるのね。まあ、やっぱり商売ともなれば、どん

なものでもそうかもしれないけれど、これも大変な商売です。

旦那さんがお給料をもらってきて、奥さんが副業としてやる、というならば五十人も教えれば十万ですし、入門料も入る。悪くないでしょう。

またしつかりした人ならば、紙や筆も問屋へ行つて、できるだけ安いのを探して、それで二割ぐらいもうけたりするしね。

しかし手軽にできるということは、それだけ競争も激しいということだから、さつき話した、子供をアメ玉で釣る先生も出るわけです。

結局これは、人間を売る商売で、先生に魅力がなければダメね。

子供が何年も居ついていて、その下の兄弟もまた入門してくるといふようでないといけない。

このごろは勉強がはげしいから、たいして小学五年になると、勉強の塾へ行かせますということまで止めてしまうから、まあ五年生までだけれどもね。続けさせるために、一年間ちゃんと来たならば、大筆あげる、とかいつてうまく扱ひ、親もときどき出て来てもらつて、作品展を見

せるとか、いろいろ上手にやる人でないとね。

先生自身も、展覧会に出品をして、実力を宣伝することが必要なんです。

そうね、適性のある人というのと、やはり多少は字が上手という自信がなければ、そもそもやる気にはならないと思うけれど、才能のほかに、一日五時間は練習するガンバリ、それからお金ですわね。

お金のある人のほうが、非常に有利です。未亡人で、旦那の残した大財産持っている人が仲間にいるけれど、こういう人のほうが、才能を伸ばしやすいですね。

私のようにお金がなくて、それこそ自立しなけりやならない人間のほうが、不利だというのは矛盾を感じるわね。

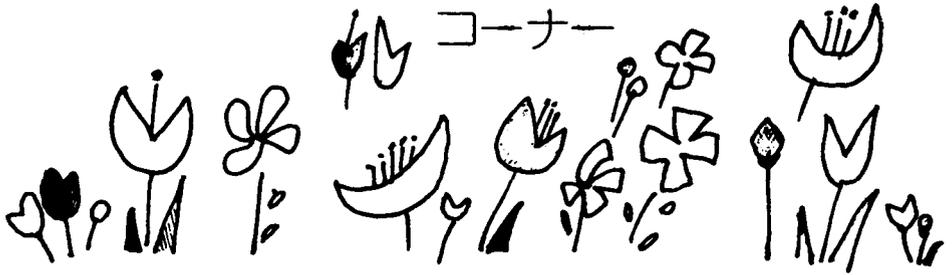
(まとめ・和田)

〈わいふ〉概刊 特集

138号	天皇とわたしたち
139号	日本の夫
140号	家事を洗い直す
141号	親のきた道・子どもの行く道
142号	日本のおばあさん
143号	主婦とウーマンリブ
144号	なぜ結婚するのか
145号	子どもを預けるとき
146号	母性とは何か
147号	女と政治
148号	ニューファミリーの実体
149号	産む性から医師へ
150号	本音の子育て
151号	女の戦後30年
	一暮しの手帖にそって一
152号	男らしさは作られる

1978年5月現在

エンピツとハガキ おしゃべり それだけで書ける



青春

茨城県 野口欣子

先日「人生の一日」という本を読んで、この言葉がたまらなく好きになった。新聞や雑誌に「生き甲斐」という文字をみる毎に子育て時代には余り感じなかったこの言葉に最近やたらに抵抗を覚えるようになった。社会人になってしまった我が子を見ていると「ひと仕事終った」という安らぎと又これから何かしたいというあせりが毎日のように出てくる。

「ためいき」と「ひとりごと」を私は日記ならぬノートに雑感を記すことにしました。

自己満足にすぎませんが何事にも欲望のある中はまだまだ若いんだ等と自分を慰めながら昼間一人でノートを出してはニヤニヤしながら私の「人生の一日」の出来事を宝のように大切にしている毎日です。

「わいふ」をはじめて読んで

何故か私 寒くなってしまうたの

どうして

あんなに届くのを

たのしみにしていたのに

だって

少し 人生を生きすぎたのかしら

判らない所があるの たくさん
やめようかしら 書くの

でも ペンを取ってみた

「心の中はまだまだ青春だよ」

主人の一声に はげまされて

「小林和子様へ」

坂戸市 高橋裕見子

お体の具合、いかがですか。

一五一号の「おしゃべり」読みました。私が書いていることを肯定した上で、なお、こんなふうに書かねばならなかったあなたの気持を考えると、もっと別な書き方ができなかったらどうかと悔やまれます。主婦について書く時、私とは又別な生活をしている主婦、働いている主婦や、体の弱い老人がいる主婦、病気の子どものいる主婦のことなど必ず頭をかすめるのですが、書きはじめるとやはり自分のことしか書けないのです。自分のことを考え、自分の生活を文章にするだけで精一杯なのかもしれません。あなたのお体が一日もはやく回復されることを祈ります。



娘といっしょに

弘前市 永山きみ子

「わいふ」は良い御本だと六十五歳になりま
す私ですが拝読させて戴いております。拝見い
たしますとすぐ東京の二十九歳の娘の所に回し
ております。二児を持ち家庭に籠る現代わいふ
の恵まれた悩みを訴えられた丁度その時、新聞
にて「わいふ」の記事を拝見いたしまして早速
お世話になっております。娘共々嬉しく拝見さ
せていただいております。

美しい野性の花を想う

カリフォルニア

川野暲子

「わいふ」の編集のお仕事いつも御苦勞様で
す。小さな雑誌とはいえ、編集という仕事は、
何によらず骨の折れる仕事だと思えます。その
上忙しい家事やその他の仕事の合い間にやらな
ければならないだけに、主婦業兼編集業は一層
大変な労力と神経がいることと、いつも皆様に
感謝しております。

今、カリフォルニアは雨期です。十二月から
ずっと嫌という程雨が降り続いてうんざりして
います。この雨が降らないと、カリフォルニ
アはひどい水飢饉になってしまうのですからこ

れも仕方ありません。殊に南カリフォルニアは
半砂漠地帯なので、一年の四分の三は一滴もと
言っても大げさではない位雨が降らない乾燥期
が続きます。一方このほんの二、三ヶ月の雨期
に一年分の雨がどつと降りまくるというわけ

です。適当に分けて降ってくればいいのにと、
これはまったく勝手な願いなのですが、南カリ
フォルニア人はお互いにこぼしています。いく
ら科学の発達した時代でも、お天気ばかりは人
間の力で自由に変えることも出来ず、私達は雨
期には毎日うんざりし、長い乾燥期にはせつせ
と庭の芝生や植木に水まきという中々の時間仕
事を強いられています。アメリカのほとんどの
農産物を産するというカリフォルニアですが、
行けども行けども続く拡大な野菜畑や果実畑を
見て下さいな。雨に頼られないカリフォルニア
では、これらの畑がすべて人工設備による散水
でやっています。日本からいらつしやつた方の
大きな驚きです。もうすぐ雨期も終ります。そ
してカリフォルニアでは一時に野性の花が豪華
けんらんと咲き乱れます。雨量の多い今年は例
年にも増してカリフォルニアポピーを始め、美
しい野性の花が到る所で見られることでしょう。
それは見事な光景です。

それでは又。編集部のみな様の御健闘を遠く
よりお祈り致します。尚こちらの日系人新聞に
掲載された「わいふ」の記事ですが「わいふ」

発展の跡を記す史料の一つとなるのではと思ひ、
切り抜いておいたのをお送り致します。

(註・このお手紙は三月頃いただいたものです。編
集部)

どうしても手が出てしまう

佐世保市 高野貴子

リンドバーク夫人の「海からの贈り物」読み
ました。この所私の感じた事と同じことが書い
てありました。生活を簡易にすると言う話です
が実に何でこんなにゴチャゴチャしているのか
と毎日いやになります。所が、先日有田の陶器
市があり、よせば良いのに出かけ、又々ゴツテ
り磁器を買ってしまった。あの器の持つ美しさ
にはどうしても手が出てしまう。こう簡単に考
えを変えちゃうようでは仕方ないですね。

151号の「暮しの手帖」に対する批判は雑誌に
おける娯楽性を無視しているような気がします。
読んでいて楽しい本という点では、この所少
々つまらなくなつて来てはいますが、それでも
手帖の持つ魅力は他をぬいていると思います。
「家庭学校」とか「すてきなあなたへ」とかは
娯楽性の強いものとしてただ楽しんでいた私で
す。そして素晴らしいカラパーペジの料理はもう
見るだけで十分。何もしかめつらしく考えませ
ん。それに対し「わいふ」の批判はきびしいと

思います。楽しい雑誌にならないければいくらよい方針をうち出しても仕方ないと思います。「わいふ」はその点教育的すぎます。でも今回の「手帖特集」は愉しく、色々な人の考えが端的に表われたと思います。そして「わいふ」編集部雑誌に対する姿勢が分りました。「わいふ」誌を、もっと楽しめる雑誌にして欲しいと考える一読者より……。

「関山由美子さんへ」

東京都 鈴木達子

冷え症の完治の方法、私の経験から針、灸をおすすめします。私も去年まで冷え症でした。冷え症ばかりでなく、生理不順、胃弱、むち打ち症とカタガタの体で、子供も結婚二年目で、ありませんでした。そんな時、友人の誘いもあって針、灸に行きました。若い人は私と友人の二人、あとはお年寄りばかりの中でシブシブ服を脱いで針を、そして涙が出る程辛いというか熱いお灸をされました。そして毎日自分でも教わって自宅でお灸を続けました。診療所では歯をくいしばって熱さに耐えた私も、自宅ではさすがにギヤーギヤーわめきながらでしたが……。そして今年二月妊娠し、今は大きくなってきたお腹をもて余し気味の毎日です。それに氷のように冷たいと言われていた手足もポカポカ暖か

く、みんな驚いている程。もしよろしければその診療所御紹介します。そこは病症によっては漢方薬も調合してくれますのでいいのではないのでしょうか。

かみしめる

足利市 長谷川トク

三冊目の本を手に致しました。151号の「詩の中の女」の女人に対する言葉を読みまして今さらながら自分の生き方を反省し、かみしめながら毎日をすごしています。

子連れで耐える

東京都 清水恵子

先日、主婦失業宣言の集会に出て貴誌を知り早速購読することになりました。四ヶ月の子供を連れての集会の参加でしたが、貴誌を知ることでもき本当によかったと思います。夫の転勤で妊娠九ヶ月で勤めを退め現在雇用保険を、職安の係官の辛辣なことばに耐えて、貰っている者です。勿論働きたいのですから職安に何度も足を運んで求職活動をしているのですが、子供を連れてではそれもままならず、また夫の理解も得られず、かなり疲れてきていましたので、同じような方がおられるということを知っただけ

でも励みになりました。現状は何ら解決されていませんがきらめかないで働き口を探したいと思っております。

私も書かなくちゃ!

宝塚市 大村輝子

読みごたえのある「わいふ」を次々とお届け下さいまして、いつも楽しみにしております。東京へバトンタッチされた「わいふ」は、素人の域を脱したような立派な本になったので、そうそう気軽にペンを持たないようなためらいがあつて、もっぱら読み手にさせて頂いております。高木わいふの頃のご苦労を少しでも知っているだけに、東京わいふのご努力に敬意を表します。150号は特によかったです。編集後記にありましたように、テーマ原稿が沢山集まったせいでしょか。

私も書かなくちゃノと思うのですが、頭の中で考えがまとまりません。そのうち書きたく思います。

151号に寄せて

京都市 片岡陽子

編集部かわりましたね。加賀町といひ二十騎町といひ新宿区には優雅な町名があるのですね。(少し前にやつと気がつきました。)

「ふだん記」と「わいふ」のつながり嬉しいことです。私も一時「ふだん記」に加わろうかと考えたことがあります。

「暮しの手帖」批判はあれだけにつけるものではないと思いますがそれでも限られた紙面にいろいろ盛り込んで下さったと感謝しています。とりわけ「戦争の中の暮しの記録」が被害者意識が大きいということに共鳴します。私もそれを感じて「感想」として送ったのです。

次に「友の会」の評価と批判はいかがでしょう。あるいは羽仁もと子の歴史的価値づけ。(これは村上信彦氏のみしていますが婦人の友誌上でもあるし彼にしては珍らしくはずれという対象美化(これは他でもありますね)が目立ちます)ともあれ私のまわりには友の会脱落者、批判者はたくさんいます。(私も五年間会員でした)

まず足もとを固めて

松戸市 安達日南子

日頃は読ませて頂くばかりで失礼しています。今回は心ひかれるテーマだったので書いてみました。大急ぎで書き散らしたものですので乱筆乱文です。

「女性の生き方」という事については日頃深い関心を持っていますが、それはおそらく家庭の中から変えて行くべきものと確信しています。

女性が変われば子供が変わり、子供は未来を象徴するものです。母性解放などと大げさな叫びをあげるより(世にアピールするという意味ではそれも大変意味深いものと心底思います)一人一人が自分の家庭において夫と子供を変えていけばより着実なものとなるでしょう。まず足もとを固めてからと思います。何はともあれ今後ともよろしく願います。

主婦というハンデについて

岸和田市 小出久子

いつも待通しい思いでわいふ誌を手にしています。今度樋口弘美様の「雑感」に対し、感じ考えさせられることが多くありました。これを機会に日頃私が、主婦というものについて考えていることを、樋口さんの書かれたことをもとにしてまとめてみたいと考えています。そして、これは決して個人を誹謗するものではありません。これは現在の主婦の持つ一般的な主婦論ではないだろうかと思っています。私の周囲にはこのような考え方がほとんどをしめると言っても過言ではないかと思えます。(もつとも、わいふ誌に参加する方はこのような考え方が少ないかもしれませんが)そしてこのような考え方をする方はあまり公には発言されないのです。たまたまそこへ樋口さんが登場されたわ

けです。これを機に問題を深く掘り下げて私なりに意見をまとめてみたいと思います。

自分を失いそう

足立区 内田由美子

わいふがある事を紹介して下さり、又すぐに送っていただき、すぐにも思えない不得手ながら手紙を書かせていただきました。けれども出しそびれ一週間二週間とすぎる内そのままになってしまいました。けれども、わいふはとも心待ちにしておりました。そして封を開き読み切る迄まるで胸がドキドキして落ちつかない私なんです。今日15日号を送っていただき、子供達まで心遣いをいただき、心からうれしく思いました。そして私何て自分に甘いのだろう、たかが三人の子供と主人の事だけにかかり切っているのについつい、お便りもせずにいってしまった自分を恥かしくも思いました。何かが見たい、やりたいたいと言葉だけで満足していた人ではないだろうか?と……。

私、半分自身を失いそうです。でもこれからわいふにぞつこんほれこんで、何とか会員の皆様の中から私流にヒントをいただきたいと思っております。そしていつの日にかこんなにドキドキさせてくださる皆様に是非お目にかかれる日があります事を望んでおります。

千葉市 川名真理子

空気のきれいな所に住みたい！この気持が高じて、東京から千葉市の郊外団地に引っ越してきました。東京は年々、スモッグが濃くなるようで、特に前に住んでいた北区は巨大な煙突に囲まれた透明度の低い地区でしたので、この千葉でさえ私には空気が新鮮に感ぜられるのです。ぼやくのは夫。「転勤した訳でもないのに片道二時間近くかけて通う身にもなってくれ」「ここもそう長くはないのだから」とごきげんをとってなだめすかして……。子供も夫もぜんそく性の気があるので何よりも空気のきれいな緑の多い所がいいのだと思いついて移っては来たけれど。本当は私自身があの灰色の空とビルの密集地帯から脱け出したかったのかもしれない。急に目に飛び込んでくる緑の多くなったのに気づき小鳥のさえずりで朝の目ざめが早くなり、自然の偉大さ、美しさに心がなごんできます。文化面では東京は便利この上もなし、でしたが、少々不便になっても自然環境の良さが、ずっと重みのある大切な事のように思えてくるのです。休日にはおにぎりでもつくって三人で散策を楽しむつもりです。

おねがい

わいふも号を重ねて今回で十五号目。皆様のご支持で何とか続いてきましたが、いまだに自転車操業から脱却できず、原稿料など、思ってもよらない状態です。

寄稿して下さるかた、談話を取らせて下さる方々のご好意にすがって、毎回の紙面づくりをしておりますが、いつまでこうした状態を続けて行くわけには行きません。その一方投稿がますます充実してきましたので、増頁を考える必要もでてきました。

この状態から脱け出すためには、予約購読者の数をふやすしかありません。二冊、三冊、時には十冊と、グループでまとめて取って下さる方も多いのですが、みなさまどうか、お友だち、あるいはお知り合いのかたに呼びかけて、仲間をふやして下さいませんか？

お一人がお一人をふやして下さいれば、それだけで大きな力になるのです。

誰かがやってくれるだろうとお考えにならずに、どうかこれを読んでいらっしやるあなたが、あなたご自身がお力を貸して下さい！心からお願ひ致します。

編集部

編集だより

▼ネーソン教授の日本語のすごさに、編集部一同ただ驚倒。「カッペ」というのは田舎っぺの略称、と教えていただく始末でありました。

▼もっぱら女性を差別することによって支えられているような日本独特の男らしさの構造が、この対談ではつきり見えてきたようです。暗然たる思いですが、この現実から出発しなければならぬでしょう。

▼「男らしさの神話」で初登場の驚見さん。わいふへの協力を自発的に申し出て下さった、真に「男らしい」男性です。めったにないことで、有難さが倍加します。

▼次回のテーマは「老いとのかい(仮題)です。老人問題は深刻です。ご自分の周囲に見聞する老いの姿、のぞましい取組みかたなど、切実な体験をお寄せ下さい。締切六月三十日です。

（わいふ）152号一九七八年五月二十五日発行

編集発行・わいふ編集部・東京都新宿区二十騎町十八林方番二六九―二三八八・二六〇―五五〇〇
定価三五〇円年間予約六冊一八〇〇円送料七二〇円
振替東京五―一〇四三〇 わいふ編集部
印刷(株)イワタ印刷千代田区富士見一ノ二ノ二五

女

エロス 10号

編集「女・エロス」編集委員会
850円

特集 幻視の政治をさぐる

恋愛をわが手に—政治と婚姻法—吉清一江／モラト
リアムから—根本一枝／はみだし主婦は開う—大貫淑
子／政治とは何か—自由と平等を求めて—岩橋善美
／女性解放のゆくえ—中国と日本—水田珠枝／敗れ
た見た—考えた—私論—吉武選挙総括—名無川砂利
女の労働—労働のなかの政治力—河野信子／資料発掘
社会主義とわが国婦人運動—高群逸枝

ファシズムと独裁

ブーランツァス著 田中正人訳 ファシズムの歴史的本質
を、コミンテルンのファシズム批判の検討などをおして
著者独自の的方法論でもって分析する。 A5判3200円

現代社会主義再考と下

いいたも著 唯物史観の再検討を基礎に、現代社会主義
の諸問題をラジカルに考察する。上巻—人類史の構想と経
済学批判、下巻—人類の危機と共産主義主体各1500円

戦場からの報告

●三里塚一九六七—一九七七
福島繁次郎著 三里塚を掘り続けて十二年。八〇〇〇枚の
ネガから選んだ現認報告。報道写真家がまとめた三里塚農
民の生活とたたかいの記録。 B5判224頁／1600円

社会評論社

東京都文京区本郷2-5-10 電話03-814-3861

よつば新書

お母さんと 女教師

永畑道子著

●六〇〇円

フリーのルポライターである著者が、その才と自由
な視点を活かして、従来の「教育関係者同士の告
発」や、その「一方的な弁解」になりがちな「女教
師論」から脱したレポートを完成。

親の出る幕

自信のある親になるために—

樋口恵子著

●六〇〇円

教育書の数ある中で、これは珍しい「親の育て方・
しつけ方」。入試、性教育、もろもろの問題を前
にあなたはどうするか。雑誌「ミセス」に一年間好
評連載したエッセイに大幅加筆したもの。

文化出版局

〒151 東京都渋谷区代々木3-22-1

TEL 03(379)1302

好評

高校・短大の副読本として採用多数！
親と教師にぜひ読んでいただきたい本！

十代の愛と性

(ティーンエージャーの悩みに答えて)

B6判206頁 価900円 訂160円

アン・ランダース著 生月雅子訳

絶賛の手紙を読者から多数いただきました

- アメリカ社会の十代の性問題を突き、いかに対処するかということに正面から取り組んだりっばな本だと思えます。まず親が読んで性に対する態度を改めるべきだと思えます。美しい訳文に驚嘆しました。
- 世間の母親にも、もちろん家庭科の先生、小・中・高・大学に至るまで、思春期に至る子供の環境にいる方々にぜひ読んでほしい本と思いました。図書課長には早速お願いして、多くの生徒が読めるよう図書室に数冊入れてくださいと申し入れました。性に関係した週間誌などを生徒たちはこそそと読んでいますが、こういう基本的な心理教育からじっくり情操教育をしていくことが、好ましい方法なのにとかねてより考えていましただけに、たいへんうれしく思いました。
- 私は、日々女子高校生を相手に、とにかく彼女たちがひどく未熟であいまいで、何か強い判断を求めていることを常感じていましたので、生徒たちに良い参考書が得られてとてもうれしく思っています。
- 流暢な訳文で読みやすく、いっきに読みました。大学生の娘にも読ませます。
- あまり良い本なので親しい先生方にお電話を入れましたら早速読みたいと喜んでいらっしゃいました。
- アメリカと日本とは少し事情が違い、当てはまらない点もあるように思いますが、「知らぬは先生ばかりなり」かもしれません。ともかく日本も米国のようになる（すでになっているかも）でしょうから注意いたします。

~~~~~ 好評図書 ~~~~~

- | | | | |
|-----------|----------------|----------|---------------|
| J・ランディス著 | 結婚の理論 | A5判
価 | 650頁
4500円 |
| I・スチュアート著 | 離婚・別居の家庭と子供 | A5判
価 | 344頁
3000円 |
| C・ビンセント著 | 未婚の母(その心理学的考察) | A5判
価 | 310頁
3200円 |

☎112 東京都文京区
目白台3-21-4

家政教育社

電話03(945)6265
振替東京7-72382